

ローカル・ガバナンスによる地域福祉に関する調査研究

久保 健太

## はじめに

「自分たちの手で自分たちの社会をつくること」。これは民主主義のごくシンプルな定義である（本研究 p27 参照）。このような民主主義は、この日本社会において、どのように可能か？

私たちの研究チームは、保育場面における子どもと大人の姿から、この問いに答えようとした。そこで、素材になる保育場面を探したところ、研究チームのメンバーである和光保育園（千葉県富津市）の鈴木秀弘さんが、年長児がプールで繰り広げた『『みてて』の渦が広がって』という場면을提出してくれた。

まずは、和光保育園の保育者たちによるレポートをお読みいただきたい。レポートは、プールの歴史から始まり（このレポートも、民主主義の歴史として、読みごたえがある）、その後、『『みてて』の渦が広がって』の場面が描かれる。

しかも、その場면을鈴木秀弘さん以外にも、健太さん、あん子さん、純子さん、奈美さん、美幸さんという5人の保育者が、それぞれの目から描いてくれた。

一つの事例を、複数の観点から徹底的に理解しようとする。この方法はグニラ・ダールベリやピーター・モスが『「保育の質」の議論を問う』という著書の中で提唱している方法でもある。以下、本研究の中間報告書<sup>1</sup>から引用する。

ダールベリらは『「保育の質」の議論を問う』という著書の中で<sup>2</sup>、「質の議論」を超えて「意味生成の議論」を行なうことを提案している。すなわち、「質の議論」では複数の事例を一つの物差しで測り、質の優劣をつけようとする。私たちのチームで言えば、くらき永田保育園、和光保育園、風の子藤水保育園という、地域も、規模も、子どもの数も、何もかもが違う保育園を、一つの物差しで測ろうとする。それに対して「意味生成の議論」では、一つの事例を、とことん多様に理解しようとする。そうして、一つの事例から、多くの「意味」を読み取ろうとし、生み出そうとする——すなわち、「意味」を「生成」しようとする。

私がダールベリらの文献の翻訳にかかわっているので、メンバーにその理論を紹介したところ、メンバーの共感を呼んだ。メンバーと語ったことを以下、記しておく。

- ・質で考えすぎてしまうと、評価の基準が「できた／できない」になってしまう。
- ・質の基準を頭の片隅において子どもに関わることは大事だが、基準に囚われすぎると、

<sup>1</sup> 中間報告書は、巻末資料として後掲。

<sup>2</sup> G. Dahlberg, P. Moss, A. Pence “Beyond Quality in Early Childhood Education and Care: Languages of evaluation (Routledge Education Classic Edition)”2013。

子どもそのものを見るのが疎かになってしまう。

- ・保育は「全体」を見るべきものなのに、質を測ろうとすると、どうしても個々の「部分」をバラバラに見てしまう。
- ・それぞれの「部分」の因果論を非線形的にではなく線形的に見てしまう。うまくいった場合も、うまくいかなかった場合も、保育者個人に、その原因を帰すことになりがちである。

こうした議論を経て、複数の事例を調査する方針から、一つの事例を徹底的に理解する方針への転換を行なった。

以上から、一つの事例を複数の観点から徹底的に理解しようとする「意味生成の議論」が理解いただけるだろう。

私たちの研究チームはこの方法を採用ことにした。5人の保育者による場面理解をおこなったのもそのためである。

ここまです「第一部 実践編」とした。

その後、「第二部 理論編」として、久保による場面理解を記した。

本来であれば、久保による場面理解を、和光保育園の保育者に読んでもらい、さらに場面理解を深めたかった。つまり、保育者と研究者とがフィードバックをし合うことで、その場面の理解を深めるという作業を行ないたかった。さらには、子どもたちにも、このフィードバックに加わって欲しかった。

しかし、久保による場面理解を記している途中で、約束の分量を大幅に超えてしまった。

フィードバックをし合うことによって、場面理解を深める。——この作業は、いずれ、行ないたいと思っている。

## 第一部 実践編

### 生命力を最大限に発揮するために場が整っていく

～鈴木 秀弘（和光保育園副園長：保育歴11年目）～

#### 夏季限定「砂場掘り上げ式手作りプール」

和光保育園には、おやじの会（在園保護者のお父さんの会）による、夏季限定「砂場掘り上げ式手作りプール」があります。

毎年、6月の初旬の週末に在園児のお父さん（※以下和光保育園での愛称：おやじと略す）



方の有志に力を貸してもらい、砂場の砂をスコップや一輪車を使って掘り上げて、木枠を組んで、工事などにも使う特大ブルーシートを敷いて作ります。在園80世帯程の中から、毎年30～40名近くの方々が参加してくれますが、子ども達が喜ぶ顔や、プールでの出来事を報告してくれる我が子との共通の話題が、大きな活力となっているようです。



保育園としても、おやじたちと一緒に汗を流しながらの作業は、普段なかなか会えないおやじたちと密に関われる時間となり、保育園や家庭での子どもの様子の情報交換だったり、職業人としてのおやじの個性を垣間見て驚いたり、学んだり、正に「育ちあいの場づくり」の要の作業として、30年間大事に続けている作業です。

#### 「しつけといたら和光」から「子どもが自ら主人公として輝く保育へ」

和光保育園は、私（鈴木秀弘：副園長）の祖父（初代園長：鈴木秀道）が、1957年に千葉の四街道にあった、旧陸軍兵舎の食堂を払い下げ、移築した建物で始めた保育園ですが、お寺が始めた保育園ということもあり、当時は「しつけといたら和光」と近所から評判なほどに「お行儀に厳しい」保育内容だったそうです。

1982年頃から、私の父（現園長：鈴木真廣：当時副園長）を含む第二世代の保育者たちは、当時社会問題にもなっていた「指示待ち症候群」という言葉が表すように、心も身体もひ弱になってしまった子ども達を目の前にして、今まで良かれと思って行ってきた「大人主導の保育」が「子どもらしくない子ども」を生み出してしまっていたのではないかと気づき、「子どもが自ら主人公として輝く保育」へ切り替えることを決意したそうです。

当時の様子を、父は『子どもに学んだ和光の保育：育ちあいの場づくり論』（2015 ひとなる書房）でこう語っています。

子どもが子ども本来の姿を表現して、目を輝かしている時って、どんな時だろう？と保育園の一日を観察してみると、自由に遊んでいる時間、つまり自分で仲間を選び、場所を選び、時間を仕切って遊んでいる時に、その子のありのままの姿の多くがあることが分かりました。さらにその遊びを丁寧にみていくと、私たち保育者が午前中に「設定保育」として取り組んでいた保育と同じような遊びを、子どもたちは自由な遊びの中でも結構しているのです。夏のある日には、咲いた朝がおの花を摘んで色水遊びやお店屋さんごっこをしたり、しゃぼん玉を作って遊ぶ遊びが結構見られたのですが、それをわざわざその自由な遊びから切り離して、設定保育として保育者が仕切り直しているのです。

当時の指導計画は、保育者の想いが前面（全面）に出て、子どもたちの遊びや生活、興味・関心との脈絡もなく、突然のように保育者の提案から始まり、保育者のしたい想いに向けさせよう、引き込もう、引っ張ろうとするから、どうしても保育者主導になる。そして子どもたちはそれに従わせられる、付き合わされることになる。わざわざ遊び直す遊びというものもおかしいし、それはやっぱり見なおさなければならないのではないかと思ったのです。このことから、私たちの準備した「設定保育」は、子どもたちの自由な遊びに対して「不自由遊び」だったのではということに気がきました。～中略～

それゆえに、子どもは（保育者の用意した）保育が終わったとたんに、「外へ出て遊んでいい？」と真っ先に聞いてくる。「遊び」が本来の活動ではなくなってしまふことを、子どもは素直に表現してくれるのです。

子どもが自分で時間や空間を仕切って夢中で遊んでいることに、「遊び」の本質がある。ひっくり返していえば、「遊び」が本来の「遊び」として取り組まれていれば、そこが、子どもが自分を自分らしく素直に表現できる場になれているということであり、そのことに価値があるのではないか。だから、「遊び」がなくなったり、遊べない状態になっている、あるいは子どもが自分を主人公として生きることができないでいるとしたら、それは「子どもが子どもとして（人間として）いられなくなっている」ことであり、それは子どもにとつての危機なのだということです。～中略～

子どもが、子どもとしていられることがなにより大事であり、そのためには「遊び」という「場」が必要なのではないか。そこで、午前中はお腹が空くまで遊ぶ（子どもらしい表現をしていられること、そして満足するまで遊ぶ時間の保証をする）ことにしました。

（P41～47）

このように、保育の切り替えが始まりましたが、当時を知る保育者にその頃の話を知ると「子どもが自ら主人公として輝かっていいな！素敵だな！と思いつつも、では、どうやったらいいのか？ということには分からなかった。」「やりかたは分からないのだけれど、とにかく子どもが輝いている姿を頼りに遊んでいた」「とりあえず子ども達と一緒に泥んこ

になっていたって感じだよね」と、嬉しそうに語ってくれます。

2017年の60周年を迎えた折に、保育の切り替えをしていた当時のアルバムから、子どもたちが輝いている写真を選んで展示しましたが、そのダイナミックさに驚かされました。今では考えられないようなことにも果敢にチャレンジしている印象です。「分からないのだけどとにかく子どもが輝いている姿を頼りに」模索していた時間こそが、保育を躍動させていたのだということ想像させてくれます。

## 夏の遊びを盛り上げたい！手作りプールが出来るまで

さて、砂場掘り上げ式プールは、こうした模索時代に創られ始めたものですが、始めから今のような形状ではありませんでした。



春になると、時々気温がぐっと上がる日があります。子どもたちは時間も空間も解放されたことで、暖かな陽気に誘われて、自然と水遊びを始めます。水たまりに飛び込んだり、川を作ったり、大人は木製テーブルや板を使って即席滑り台を作って、子どもの遊びを更に盛り上げます。面白そうなことが一度始まれば、もっと面白そうなことが次々と浮かんで来て、陽気の助けもあり、夏

に向けてどんどんとダイナミックな水遊びへと進化していきます。

保育の切り替えをする以前から、夏場はビニール製のプールなどを用いて水遊びはしていたようですが、保育の切り替えを機に、子どもたちとの夏の遊びをもっと盛り上げたいという思いから、プールづくりの工夫が生まれていったそうです。

## 当時のことを園長に聞いたことを頼りに記します



始めは、砂場（屋根と木枠で周りから仕切られた空間が、即席プールを作るのに丁度良かった）を少し掘り下げて、柱にブルーシートを紐で結んで、ハンモックのように張ったところに水を入れて遊んでみました。しかし、そのうちに紐やシートが緩んで来て、水がこぼれてしまうので、更に砂を掘り下げてみました。

しかし、子どもたちが出入りするうちに、砂や泥がプールの中に入り込んでしまい、すぐに泥水になってしまうということが続きました。

その後、砂場の屋根や木枠が朽ちてきていたのと、砂遊びや泥んこ遊びを砂場だけに限定せずにやれるようにしたいという思いから、枠を取り払い、それを機会に、より広い穴を掘り、シートの周りにすのこ板を敷いて、踊り場を作りました。



柱代わりに外用テーブル等にブルーシートを縛っていましたが、すぐに動いてしまうので、より重たいものや、鉄棒等に縛り直してみたりと、その都度々々工夫を重ねたのですが、やっぱり水が漏れてしまったり、泥水になってしまったりと、素人がやれることの限界を感じていました。

その頃、園長は地元の青年団の仲間たちと共に、お祭りのお神輿や山車を自分たちの手で作ったり、やぐらを作って盆踊りを催したりと、地域を盛り上げるために力を注いでいました。

その仲間でもある、在園児のお父さんの大工さんに手伝ってもらい、とりあえずと砂場を掘り下げた隅に杭打ちをして、その杭に板を打ち込んで箱を作ってブルーシートを被せるという方法で作りました。しかし、それもすぐに壊れてしまうような改良の余地を十分に含んだものでした。

その頃、運動会の時のビデオ撮影でしか出会えなかったおやじたちを、どう保育に巻き込めるか？という思いもあって、丁度、東京電力から古電柱を沢山もらえたことをきっかけに、おやじたちの力を借りて大型遊具（青空広場：竹登りや綱登りもある空中デッキ）をつくりました。それが出来たことが自信になって、「こうやってみんなでやればできるんだ！」という雰囲気に参加したお父さん達の中に膨らみました。その当時お爺ちゃんを含めると、大工さんが4人もいたこともあり、その



支えがあれば、素人集団でも「家一軒建てられるんじゃないか」「それならば親子文庫をつくらう！」ということになって、そういう仲間に材木屋さんもいて、木材をログハウスのように積んでいく工法を提案してくれました。



そして、素人が主役、プロがサポートという形で、ログハウス風親子文庫が出来上がりました。

そういう経験が響き合う形で、「手伝って！」といえ、おやじたちが力を貸してくれるということが段々と分かってきて、園長独りで大変だった穴掘りも、プール作りも「おやじの出番日」として、おやじたちに力を借りて行く、毎年恒例の作業になっていきました。

お父さんたちの力を借りるようになってからは、やれることも格段にレベルアップしま

した。丈夫で壊れないプールを作れるようになったのですが、常設にしなかったのは、夏場以外は砂場として使える環境や、広い園庭で走り回れる空間も大事にしたいという思いからでした。

改めて振り返って整理してみれば、

- ・夏の遊びを盛り上げたい。
- ・おやじたちを保育に巻き込みたい。という保育園の願いがありました。

その願いの周辺に、

- ・「力を貸して」と言えばすぐに手伝ってくれる仲間がいた。
- ・素人が主役でやれることを支えてくれるプロが居てくれた。
- ・そういう環境の中で「やればできるんだ!」という雰囲気がおやじたちとの関係の中に膨らんできた。
- ・子どもたちも遊びや育ちの反応として返してくれて、手応えを感じる事が出来た。

以上のことが、保育園の願いを軸に、上手い具合に寄り合いながら形になったことなのだと感じます。

更に、プールがある場所も、水を溜めるには、窪地を作らなければならなくて、それには砂場が丁度良かった。その場所がたまたま井戸や園舎からも近くて好都合だから、今も当時と変わらない場所にあり続けるのです。

木材が腐ってきたり、ブルーシートに穴が開いてしまうこともありますが、その都度々々修復しながら使うのが、肩ひじ張らずに、緊張を解してくれます。

こういった、可変的で持続的な場だからこそ、子どもたちもその場に自分たちなりの参加ができるのだと思います。

6月のまだ肌寒い頃は、必然的にプールに入る頻度は少ないのですが、暑さが増してくれば、自ずと水場へ足が向きます。水を信頼して溶け合う子にとっては、6月を待たずとも水遊びをやりたいくらいの気持ちがあります。一方で、何事にも慎重に距離を取る子もいますので、そういう子が緊張せずに水と出会う環境も同時に保証しなければなりません。

夏の遊びを盛り上げたいという思いを根底に持ちながらも、そういう一人一人の水との距離感の違いも大事にしてあげなければなりません。そこで、プールより少し控えめに水遊びができる「じゃぶじゃぶ池」を建設して、まだ気温が上がりきらない季節の水遊びをしたい気持ちにこたえました。プールやじゃぶじゃぶ池が整っても、子どもたちの水浴びや泥んこへの好奇心は留まることを知らず、園庭のあちこちで繰り広げられています。



こうやって、季節の移ろいや、子どもたちの遊びと、和光保育園に備わった環境と対話をしながら、日々流動的に遊びが生み出されています。

### 「みてて」の渦が広がって

さて、そんな夏の出来事です。この年の夏は、お盆過ぎから随分と暑い日が続いて、子どもも大人も水場で過ごす時間が多くなり、その分、温んだ水と溶けあい心身を開放している子ども多いような印象を感じていました。

8月末のある日、私は2階で事務仕事をしていたら、園庭から「すごーい!」「みてて!」という声が聞こえてきました。その声色に楽し気な雰囲気を感じながらも、目の前の事務仕事を進めていると、その内に、「すごーい」「みてて」の声の量がどんどん増えて行って、さらに、始めはバラバラだったその声が、束なってやってくるようになってきました。

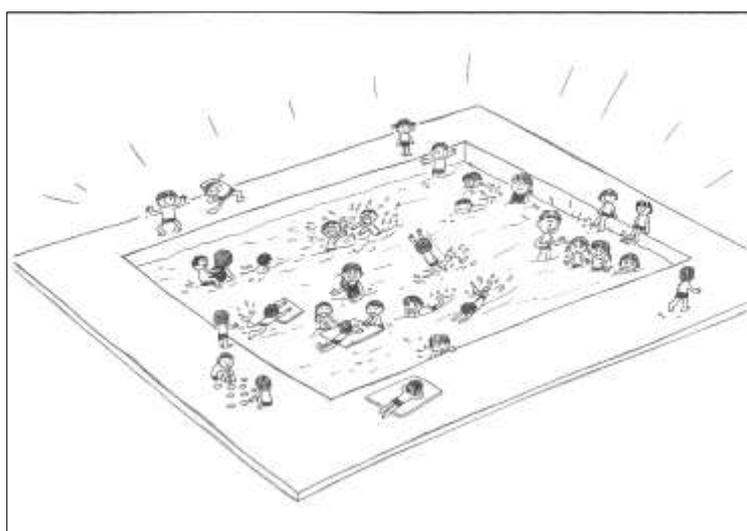
その声の主の一人は、年長担任の健太さんだということは、すぐに分かりました。とても嬉しそうに「すごーい」といっています。「みてて」と言っているのは年長さんが多そうだな?いや他にもいそうぞ!と、居てもたってもいられずに、窓から声のする方を眺めてみたら、プールの中で泳いでいる子と、それを周りで見ながら「いいぞ!いいぞ!」と応援する大人と子どもがいました。その活気が溢れ出る状況に、益々居てもたってもいられず引き寄せられて、私は急いで階段を下りてプールに向かいました。

私が、居てもたってもいられなくなるのは、そこで行われていることが、私にとって「面白そう」なことだったからです。子どもの「みてて」に、これでもかというほどの声色で「すごーい」と応える大人がいて、それがわざとらしくなく、心の内から湧き上がってきているように感じました。そんな「すごーい!」のなら、私も見たい!あの活気の中に入りたいと思ったのです。

後から年長児担任の健太さんに聞いたのですが、その時プールの中ではこんなことが起きていたそうです。(村だより 2016年9月号より)

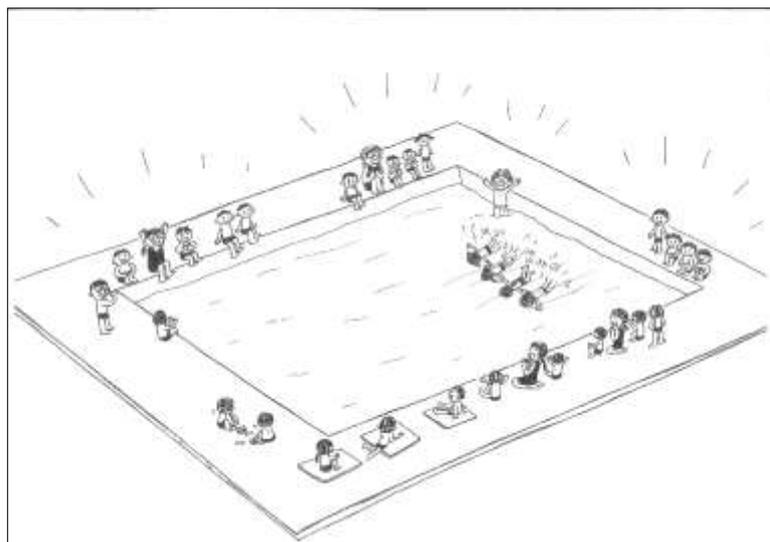
年長のみーちゃんと、ゆいちゃんが健太さんに「てをつないでおよげるよ」といってきたそうです。健太さんは、何事にたいしても慎重な印象のみーちゃんが、友だちと一緒に自信気にそう言うので、嬉しくなって「おお!見せて見せて」と言ったそうです。

すると、二人が見事に手を繋いで浮いて見せてくれたので、健太さんは益々嬉しくなって「おおすごーい!」と言ったそう



です。すると、それを周りで見っていた子達が、「わたしもやりたい」と参加してきたそうです。次から次と代わる代わる手を繋いで泳いで見せてくれました。そのうちに、「こんどはけんたもいっしょに、4にんでやってみよう」と一段と盛り上がったそうです。

すると、その一連の様子や声が届いていたのでしょ。近くに居た保育士のあん子さんが「どれどれ、じゃあ見せてもらおうよ」と言って、ほかの子達にも声をかけてくれて、場所をあけてくれたそうです。



はる組の4人組はその空いた場所をいっぱいに使って、手を繋いで“けのび”（プールの壁をけて伸びて浮く）を見せてくれました。

すると周りから「おおお！すごい」と歓声が上がりました。そして、そのはる組の4人の姿と歓声に触発されたのでしょ、

「わたしもやりたい」と次々に声が上がったそうです。

そこで、やりたい子たちが順に前に出てきて、年長さんの4人がやった「けのび」のような泳ぎ方を、それぞれの出来るやり方で披露してくれたそうです。

そのやり方は実に色々です。年長さんのように潜ったり浮いたり出来る子もいます。顔だけ水につける子もいます。ワニ泳ぎ（腹ばいになって顔を上げてワニの様に泳ぐ）の子もいます。それぞれが、自分のやり方で参加していたそうです。中には、今までは顔をつけるのを怖がっていたので、“ワニ泳ぎを見せてくれるのだろうか～”と大人が思っていたら、雰囲気の後押しされて、顔をつけて泳いで見せてくれる子もいたそうです。

順番での披露し合いは、何回も繰り返されました。その度に益々盛り上がって、園庭中に「いいぞ！いいぞ！」と嬉しそうな声が響き渡っていました。その声が私のいる二階にも届いてきていたのです。

私が、プールに着いた時には、披露し合いが落ち着き始めた頃でした。最後に年長さん達が、一番自信のある特別な泳ぎ、その名も「けのびをしてそのままぜんぜんうごかない」という技を見せてくれました。けのびをした後に、バタ足もせず水に身を委ねて向こう岸まで進むという技です。私が見た印象ですが、本当に心から身体を水に委ねて、水と一体となっている姿に、「美しさ」を感じる程でした。周りで見っていた子達も、一瞬息を呑んだ後に、また一段と大きな歓声が上がりました。その盛り上がりの勢いの中で、誰か一人が「ねえながれるぷーるやろう！」と提案しました。健太さんはすかさず「いいね流れるプールやろ

う！」と賛同し、周りの子達に言いました。すると、「いいね」「ながれるぷーる」「ながれるぷーる♪」「ながれるぷーる♪」と、湧き立った歓声と雰囲気、「ながれるぷーる♪」という掛け声が変わっていき、周りで見っていた子達も次々にプールの中に入っていき、プールの中に大きな渦が生まれました。（※流れるプール：プールの中でみんなで走り回ること、洗濯機のような渦を作り、その渦の流れに身を委ねる。近所の県営プールに「流れるプール」があり、それを自分たちなりに模して始めたものが脈々と受け継がれている。結構楽しい。）

私は、その渦の高まりを、少し離れた園庭から眺めていましたが、縁側やステージからも私と同じようにプールを眺める子どもの視線があることに気づきました。きっとその子達も面白そうな声や姿に引き寄せられたのでしょう。

そして、いよいよ「いちにのさん♪」でプールの中の人たちが水に身を任せた時、縁側で見っていたわっ君が、プールの子達の動きに合わせるかのように、座っていた身体を床に預けて寝ころんだのです。

私はそれを見て、「あ～、きっとわっ君も、心の中では“今”プールに入っているのだろうな」と思えたのです。

ふっとステージに視線を移すと、えりき君も寝転がって嬉しそうに見ています。

なんだかそこに居るみんなが嬉しそうな顔をしています。

これは、2016年夏の村だより（保護者や村びとに宛てた便り）に載せた文章ですが、今回の研究にあたり、もう一度振り返り考えてみたくなり、この村だよりや動画を元に、その場に居た、健太さん（年長児担任：4年目）、あん子さん（1・2歳児担任：保育歴30年）、純子さん（年少児担任：保育歴6年）、奈美さん（年少児担任：保育歴2年）にも改めて話を聞いてみました。すると、私には見えていなかった、より鮮明なその場の状況が見えてきました。

そこで、以下のように、それぞれにその時見ていたこと、感じていたことを改めて書いてもらうことにしました。

## 楽しいが広がって！！

～健太さん（年長児担任：保育歴4年目）～

プールに入っていると背後からゆいちゃんに『みててー』と声を掛けられました。

私は『え？』と振り替えると、ゆいちゃんとみーちゃんが嬉しそうな表情で笑いながら手を繋いでいました。そして、二人は私の視線を確かめると、手を繋いだまま一緒に泳いで見せてくれました。

私は、みーちゃんが「見てて」と、ちょっと得意気な表情をしていたことと、泳いでるときにとっても楽しそうな表情を見て、とても驚きました。

なぜなら、私の中では、みーちゃんは水しぶきが自分にかかってくると体をそらせたり、背中を向けたりする程、プールが得意じゃない印象だったからです。

なので、私は心の中から『すげえ！！』という声が湧き出てきました。みーちゃんとゆい

ちゃんは、そんな私の驚きに伝えてくれるかのように、何回も手つなぎ泳ぎを嬉しそうに見せてくれました。私は益々二人に釘付けになっていきました。

このときの“すごい”は、「手繋ぎ泳ぎという技」がすごいというよりも、あのみーちゃんがプールで嬉しそう・楽しそうな表情を見せてくれていることがすごいのです。さらに、その笑顔の背景には、“私を見て”というよりは、ゆいちゃんと二人で出来ている喜び（“私たちを見て”）があるような気がして、二重のすごさを感じていました。更に、あのプールが苦手だったみーちゃんが嬉しそうにしているということを、傍らで自然に支えているゆいちゃんの存在もすごいと思いました。この喜びが、みーちゃんにとって『あ、なんかプール楽しいな』と感じられるきっかけになったらいいな〜と、益々応援したくなったような気がします。

すると、すぐ近くに居たのんちゃんたちが『私たちもやりたい!』と3~4人集まってきました。私は『ますます盛り上がるだろうなあ』とさらにワクワクしてきました。

何度かペアを交替しながらやる中で、私もその仲間に混ぜてもらい、手繋ぎ泳ぎを堪能させてもらいましたが、そのときに手を繋いでる「安心感」と同時に“一緒”という「心が繋がっている感」を感じ、みーちゃんが嬉しそうにそして得意気な表情をしていた気持ちがちょっとだけ分かったような気がしました。

どんどん盛り上がって、私もみーちゃんも含んだ4人で手を繋いでやってみようと言っていた時、楽しさが伝わっていたのか、傍にいたあん子さん（1.2歳児担任）が「私たちにも見せて」と言ってくれて、4人手繋ぎ泳ぎが広々とできるように、周りの子にも協力してもらって場所をあけてくれました。

その広々した空間で、みーちゃんや私たちは思う存分4人手繋ぎ泳ぎを堪能させてもらいました。

すると、私たちが顔を上げた途端に、周りでみていた子たちが「すごーい!」と驚いてくれて、次の瞬間には、「やりたい」「私もやれるよ」と、ウズウズと自信が身体中から溢れていました。

「私たちもやっちゃおう!」と交替々でプールに入り、それぞれの得意な技を見せ合いました。その度に、「すごーい!いいぞ!いいぞ!」という歓声が湧き上がり、その度に「次は俺たち」「次は私たち」と、楽しい時間が続いていきました。

最初はみーちゃんとゆいちゃんの二人で始まった小さな出来事が、いつの間にか周りの子にも「やりたい」と感染していきました。その、「やってみたい」をやってみれる環境と、それを見て『すごい!』と言ってくれるギャラリーの雰囲気、私は、とても居心地の良さを感じていました。

ひとしきりプールに居たみんなが技を見せあった後に、「流れるプールやろう!」といった子がいました。私は「いいね!流れるプールやろう」と即答しました。こんなに楽しいことをみんなでやっていたら、その仲間で更に楽しいことをしたくなっちゃう気持ちが分かるし、私自身もそう思っていたのです。まるで、友だちと一緒に遊びに行った帰り道で、「今

度は何しようか？」と、次の予定を一緒に考えている時のようです。この楽しさをもっと長く味わいたい！終わりたくない！という気持ちが湧いてくるのです。私の中のそういった感情体験と、子どもの言葉が響き合いました。

私は、みーちゃんとゆいちゃんが手繋ぎ泳ぎを始めた経緯は見ていなかったのですが、最近二人は気が合うのか一緒にいることが多いことを感じていたので、その関係が根っこにあることなのだろうなと感じていました。

「やりたい」と思えたり、その気持ちを「支える関係」が響き合っているようで、とても羨ましいと思ったし、こういう関係が大事なことだなと思いました。

## できるだけいい気持ちを味わってほしいな

～あん子さん（1・2歳児担任：保育歴30年）～

友だちと一緒に健太さんに見せているみーちゃんの姿を見て「お！？いつも消極的な印象のみーちゃんが！いいじゃん！」と思って横目で見ながら、自分の周りに居た1・2歳児と遊んでいた。年長さんたちに「見せたい」「見て欲しい」という自信が高まってきていることを感じていた。その内に、みーちゃんを含んだ4人組が手を繋いでやるといったので、周りの子がいることでやりにくいより、できるだけいい気持ちを味わってほしいな。すこし改まったところでも見せてくれるかな？見てもらう場でやれたらもっといい気持ちになれるかもと、後から振り返ればそんなことを考えながら4人の為の場所を開けるように周りに提案してみた。「今までのみーちゃんだったら、見られる＝緊張だったけど、今は“見てほしい”が勝っているような気がする」という気持ちが働いて、“特別に見せてもらえる場所”を作ったと思う。

そうしたら案の定！みーちゃんがしっかりとした蹴伸びを見せてくれて嬉しかった。みーちゃんの心や実際に行動できることに成長を感じ“嬉しいな”“良かったな”と思った。

そうしたら、大きい子たちが次々に代わる代わる、自分たちの得意な技を披露してくれたので、そういう周りの子の“見せたいムード”に「よーし！私たち（2歳児と1歳児）もやっちゃお♡」と思えてきて、“年長さんたちみたい”に“見せる場”を楽しんだ。

その度に益々盛り上がり、園庭中に「いいぞ♪いいぞ♪」と嬉しそう声が響き渡っていました。

それぞれのペースで“見せる場”を使えて、みんなが心地よかったと思う。「いいぞ、いいぞ」と見ている人たちに言ってもらえるしね。「自分っていいじゃん」が、その場に居たみんなの心の中にあっただと思う。「私っていいじゃん！あなたもいいじゃん！」みたいな。それぞれの担任が、クラスの子ども達と「よーし“私たち”も」という結束？を見せてくれて、若い子たち（保育者）「いいぞ～♪」という気持ちだった。

## 引っ込み思案なあのみーちゃんが！

～純子さん（年少歳児担任：保育歴6年目）～

私が担任をしていた年中の頃のみーちゃんは、プールには入るけど、顔に水がかかるのが嫌だったり、顔を付けたりも出来るけど、“できることならやりたくない”そんな印象があった。

普段の生活の中で、気心の知れた子たちには言いたいことを伝えたり、おしゃべりも沢山するけど、見られることを意識すると、視線が気になって無口になってしまうことが多い子でした。これはあくまでも私の印象ですが、“自分の言うことが相手にどう捉えられているのか”を考えると、ドキドキや不安が大きくなってしまいう子なんだなぁとっていました。なので、年中の頃は、そういうみーちゃんの気持ちを受け止めながらも、ドキドキや不安を自信が上回るようになればいいな～とっていました。

そんなみーちゃんが、「見てて！！やれる！」と自信をもって健太さんに言っているのを見て、すごいな！こんなにみーちゃんがやる気になっているのは何でだろう？と気になって、健太さんとみーちゃんのやりとりを見ていました。

すると、健太さんに得意な泳ぎを見せた後に、みーちゃんたちが私のところにも自信満々にやってきて、見せてくれました。私は、自信を持って気持ちが高ぶっているみーちゃんたちを見てワクワクしました。「すごい！」と手を叩いて喜んでいると、その姿に私の周りに居た年少の子たちも「やってみたい！！」と触発されて、みーちゃんたちを真似て見せてくれたり、“～なら出来る！！”といった感じで、自分なりの得意技を見せてくれました。こうやって、大人に「すごい！！」と言ってもらえることに、他の子たちもすごく心を動かされているなと思いました。

みーちゃんたちが見せてくれたことがキッカケで、年少の子たちもすごくやる気になっていました。

私は、みーちゃんが“見せたい”“やりたい”をみんなの前で言えるようになったんだな～、“見てほしい”って思えるって素敵だなぁとっていました。

その時に、あん子さんが「見せてもらおう」と言って場を広げるように提案してくれて、それにもみーちゃんがやる気満々で気持ちが前に向いているのを見て、みーちゃんのその気持ち（見て欲しい？）を見たい！！と思ったら益々前のめりになっていきました。

正直なところ、同じクラスの担任のなみちゃんもプールにいて、ここに担任同士二人いたら外で遊んでいる子たちは大丈夫かな～とも心の中で思ったのですが、それでもみーちゃんの姿を“見たい”という気持ちが上回って、ここに居させてもらいました。

4人の蹴伸びを見て、みーちゃんの充実感や一緒にやる仲間とのやりとりに、素敵だな～と思いました。そういうみーちゃんの気持ちに肩ひじ張らず付き合ってくれる健太さんの存在があって、二人の間に信頼関係が育っているからこそ、起こったことなのだなと思うと、そういう関係が素敵だなぁと思いました。

年長だけじゃなくて、他の子たちが「やりたい」って言った時に、その場の大人の空気が「やってみな～」「見せあいっこいいかもね～」という雰囲気だったことを感じていました。だから子どもたちも、“やってみよう”という雰囲気になれたのだと思います。

みーちゃんにとって、“仲間に支え・支えられる”という関係が築かれているな～と感じ

ました。以前のみーちゃんは“自分と向き合う”“自分で悩む”…という姿だったけど、周りの仲間たちの姿に魅力を感じて、苦手なこともやってみようと思える心が今までと違っていると感じました。きっとその背景には、みーちゃんが苦手なことも得意なことも、受け止めてくれる仲間がいるのだと思いました。

後にヒデさんや健太さんと話していて改めて思いだしたことなのですが、色んな参加の仕方があっていいというのが、今までは分かっているつもりになっていたけど、本当にそうだなと思いました。それは、流れるプールが終わった後に、その場に居なかった子たちが、プールに入ってきて、年長さんがやったような“蹴伸び”をやってみようとしていたり、水が苦手なたくみ君やおと君が、その日のお昼ご飯に「みさきやってたね」みたいなことを私に言ってきて、驚いたことを思い出しました。水が苦手な子たちだけど、どこからか見ていたんだな～、楽しそうな雰囲気を感じていたんだな～という印象が残っています。一部始終を縁側で見ていたえりき君は、次の日にプールに入るや否や蹴伸びを見せてくれました。こうやって“プールの中に入っている”ことだけが参加じゃないんだな～と思いました。

## だんだんと引き込まれていった

～奈美さん（年少児担任：保育歴2年目）～

みーちゃんと私の関係はあまり濃くなく、みーちゃんのことをよく知らなかったのだから、とあの場で、あん子さん、健太さん、純子さんと同じくらいのエネルギーでみーちゃんのことを見ていなかったと思います。

だから、“みーちゃんプール苦手なんだな～”ぐらいは知っていたけど、同じプールの中には居たものの、私はみーちゃんにあまり注目はせずに、自分のクラス（年少）の子ども達と遊んでいました。

でも、健太さんが、みーちゃんの泳ぐ様子に思いっきり喜んでいる姿を見て、“こうやってみーちゃんが泳ぐことは凄いことなんだ”ということを感じて、私もみーちゃんのことを気になっていきました。

そして、あんさんが、みーちゃんや年長さんを見よう・応援しようとしていたり、他の大人たちが喜んでいる雰囲気を、なんだか嬉しく感じていました。

あの子たち（みーちゃんたち）の為にプールを開けてあげようと思えたり、やった時には、しっかり見てくれて、一緒に喜んでくれる・・・そんな大人たちや、仲間が居いて、みーちゃんは幸せ者だな～と私も嬉しくなりました。

気が付けば、みーちゃんのことにはあまり知らなかった私が、“やれてよかったね”“こんなに素敵な人たちがみーちゃんの傍にいてくれて良かったね”と、みーちゃんに思いっきり注目をしていました。

年少の子たちも、この一連のことを一緒に見ていたし、拍手しながら喜んでいました。きっと、あん子さん・健太さん・純子さんのことも見ていたんじゃないかな～と思います。

いつもとちょっと違う日、色んな大人たち、子ども達が大喜びしている日。だから、“自分も自分も！！”すごいから！みてて！“きっとびっくりしちゃうよ！”と、気持ちも沸き

立っていたんじゃないかな～と思います。“やりたーい”と年少の子たちの勢いもいつもより凄かったし、大きかったように感じていました。

### まるで台風のような ～改めてその時起こっていたことを表現するならば～

～鈴木 秀弘（副園長：保育歴11年目）～

私にはその時、一人一人の振舞いや溢れ出る活力を見ながらも、プールの中に集まった活気や流れるプールの渦が、まるで一つの生命現象のように見えていました。

一人一人から活気が溢れ出ていて、一人一人の輪郭をぼやかせています。プールという場に、目には見えないのだけど、でも確かに見える活気が溢れていました。

その活気がエネルギーとなって膨らんでいく。その活気に引き込まれていく周りがある。誰かに仕組まれて出来上がった形というよりは、活気が形を創っていくような感じがしたのです。

例えるならば、内海の渦潮や台風のような感じですか。

潮と潮がぶつかり合って出来る運動エネルギーが渦をつくる。その渦の運動エネルギーが周りの水を引き込み、引き込む力も強くなるから、渦という構造自体も大きくなっていく。

台風も同じです。温められた海水が蒸発し上昇流を生み、上空で冷やされた空気が下降流となって、上昇流と下降流の運動が対流となって渦を作ります。その渦の運動エネルギーが、更に周りの温かい空気を引き込みながら育っていく。だから海水温が温かければ温かいほど台風は大きくなって、長く維持し続けます。渦潮も、ぶつかり合う潮の流れが続けば渦の運動エネルギーや構造は維持されますが、それがなくなれば消滅します。こうやって、一定の入力のあるときにだけ、その構造が維持され続けるようなものを「散逸構造」というそうです。

つまり、私は、このプールの中で起こった出来事が、子どもたちの内から湧き出る活気が散逸構造を生み出しているように見えたのです。もしかしたら、それは「流れるプール」が、プールの中で渦のように流れを生み出すものだったから、渦潮や台風を連想しやすくしているのかもしれませんが、それだけでなく、確かに“子どもの活気”が上昇流と下降流を生み出して、その対流が渦となって大きな活気、まるで台風のような大きな運動エネルギーとなって育っていったのです。

今振り返ってみたら、この渦が起こる直接的な“きっかけ”となったのは、みーちゃんとゆいちゃんが二人で健太さんに「みてて」といったことです。二人は手つなぎ泳ぎができるようになって、思わず誰かに見せたくなる程嬉しかったのだと思います。健太さんが記してくれたように、二人で手を繋いでいる関係そのものを味わっていたのかもしれません。その気持ちの高まりを、投げかける相手が健太さんでした。ここで小さな上昇流が生まれました。

健太さんはその「みてて」に答えようと、見る側に回ります。なぜ、見る側に回るかと言えば、みーちゃんのこれまでを思うと、嬉しそうにゆいちゃんと二人で得意な技を見せようとしていること自体に、凄さ・嬉しさを感じていたからです。なので、健太さんはその上向いた気持ちにしっかり応えるために、動きを止めて見るに転じたのです。そういう行為を下

降流と言いつけるのではないかと思います。すると、みーちゃんたちは得意げに技を披露してくれるので、健太さんは心から喜びが溢れ出て「すごーい！」と嬉しそうに叫びます。今度は健太さんが上昇流になりました。その反応を味わうみーちゃんたちは下降流になります。そして、その反応を十分に味わって更に高まった気持ちを、健太さんの向こう側で見ていた純子さんに向けてなるべく移動します。すると、すかさず、その空いたスペース（空間的にも心的にも）に、周りに居たのんちゃんたちが「のんちゃんたちもできるよ！」と飛び込んできました。健太さんはそののんちゃんたちの上昇流に應えるべく、また下降流となります。みーちゃんたちが純子さんに見てもらいたいのは、これまでの関係が濃密だからともいえますし、純子さんがみーちゃんたちに熱い視線を送っていたからです。純子さんはみーちゃんたちの上昇流に應えるために、下降流になります。そして、自分の目の前でも得意げに見せてくれるみーちゃんたちの姿に、純子さんも「すごーい！」と心から応えたので、みーちゃんたちは益々自信満々です。するとすかさず、純子さんの周りに居た年少の子たちが、「みてて」と自分たちもみてて欲しいと、純子さんのスペースに入ってきます。なので、その上昇流に應えるために、純子さんは下降流となるのです。健太さんは健太さんで、見る側に徹することなく、湧きたった気持ちを、そのまま上昇流として子どもたちに投げかけ、自分の技を披露したり、一緒に混ぜてもらったりしています。そういう振舞いが、益々上昇と下降の渦を色濃くしていきます。こうやって、さっきまで小さかった活気の渦が、プールの中で同時多発しながら大きくなっていきました。その活気の渦自体は目には見えないのだけど、確かに「みてて」「すごーい」の歓声のリズムや、周りの湧きたった振舞いや、水しぶきなどになって表れています。

その渦の中にあん子さんもいて、一段と高まったみーちゃんや健太さんを含む4人が手繋ぎ泳ぎを見せてくれるという上昇流に、最大限の力を発揮させてあげられるように、「それなら場所を開けて見せてもらおうよ！」と提案します。その場に居た誰もが（ほとんどの人が）“それはいい考えだ”と思えたから、他のみんなも素直に場所を譲ってくれました。そう思えるのは、先ほどから「みてて」という上昇流と、それに應える下降流が、心地よいリズムや雰囲気となって、この場全体を包んでいたからだだと思います。だから、「みてて」あげる行為の中に「次は自分たちの出番があるぞ！」という予測が含まれているのだと思います。

年長4人は、みんなの温かな視線を感じながら、4人手つなぎ泳ぎを堪能しました。すると、周りに居たみんなから、ひと際大きな「すごーい！」「いいぞ！いいぞ！」という歓声が湧きたちます。

それと同時に、周りの子たちもプールの中に流れ込みます。こうやって、さっきまで以上の大きな活気の渦が出来上がっていくのです。

見せる側と見る側の役交替をしながら、自分たちで活気の渦を回していきます。回していくというよりは、上昇流と下降流の役交替が、自然と渦を創っていくような感じです。その場に居た人たちは、自らが渦を創る要因でありながら、その渦のエネルギーを活用しているような感じがします。まるで台風のような感じです。

加えていうならば、役交替が起こるのは、自分の活気を最大限に発揮するために起こるといっても良いのではないかと思います。

プールにいるみんなが同時に技を披露しても「すごい」という歓声を十分に味わえないのです。

みーちゃんは、あん子さんではなく、健太さんに見て欲しかったのです。それは、健太さんならきっと喜んでくれるに違いない！という期待を持っていたからです。健太さんの次に純子さんに見せたかったのも、純子さんならきっと喜んでくれると思えたからです。みーちゃんにとっては、純子さんの眼差しも、そういう期待を膨らませる要因になったのではと思います。

このように、子どもたちの「みてて」に込められた期待は、相手に対する信頼関係に基づくものだと思います。この場で起こったこの活気の渦が、日常の信頼関係に支えられていることが伺えます。「あの人に見て欲しい」という期待が生まれているのです。その期待の中には、“きっと『すごい』と喜んでくれるだろう”という予測が含まれているのだと思います。

その予測を、実際に自分の身体や道具を使って具現化してくことが行為といえそうです。

そして、実際に行為してみたら、案の定「すごい」といってもらえると、その満足感や充実感が溢れ出し、次なる前向きな予測が生まれます。その前向きな予測と応えてくれる人が信頼関係となっていくように思います。

改めて、自分たちから湧き出る活気を、最大限に発揮する為に、最高の場を子どもたちは求めています。その為に、みててもらおう状況や場にもこだわります。そのこだわりの、役交替を生むのだと思います。「自分も『すごい』って言ってもらえるよきっと」という信頼のある前向きな予測が生まれ、その予測を具現化するために最良の方法を選び作り出すとするのです。

## 生命力を最大限に発揮するために場が整っていく

12月の末頃、野原に、水仙が生き生きと花開き、爽やかかで甘い香りを漂わせています。その足元にはハコベやホトケノザなどの春草たちの芽吹きが、朝露を溜めてキラキラと輝いています。

ついこないだまで野原の主役だと思っていた夏草たちは、少々の種を身に残したまま春草の芽吹きの布団代わりになっています。

春草が好む季節と、夏草が好む季節がそれぞれにあって、お互いに最高のステージに上がるべく、それぞれのタイミングで芽吹き茂るのです。

もし、全てが同時に輝こうとしたならば、きっと窮屈で思う存分生命力を発揮することが出来ないのではないかと思います。夏草は自らの命を最大限に発揮できるタイミングで芽吹き茂り実を付けて、枯れていきます。それとは全く反対のリズムを刻む春草たちが、夏草のベットに支えられて、今度は自らを輝かそうと控えているのです。

更に、その輝きや引き立て合いが、土壌の栄養となってその場の活力となっていく。

子どもたちも、自らを最大限輝かせるために最良の場を、自分たちで整えていくのです。

それは、大人も同じです。子どもたちの「みてて」に応えるのと同時に、「見たい」気持ち  
を最大限に発揮するために、ごちゃごちゃしている状況を整えたり、一人一人の呼びかけ  
に立ち止まって応えてあげられる場を作るのです。

もしかしたら、野原で起こっていることと、プールで起こっていることも、同じなのでは  
ないかと思えてきたのです。

### こういうことが起こる場はどんな場なのか？

お互いがお互いに、自らを輝かせながらも、お互いにお互いの輝きを引き立てている。そ  
の間にみなぎる活気が、一人一人の輪郭をぼやかして、まるで一つの塊のような、生命現象  
的な高まりが出来上がりました。

それぞれが得意な技を見せ終えた時、誰かが「流れるプールやろう！」といいました。そ  
れに即座に反応したのは健太さんでした。健太さんはその時に“こんなに楽しいことをみん  
なでやっていたら、その仲間で更に楽しいことをしたくなっちゃう気持ちが分かるし、私自  
身もそう思っていた。”そうです。

多分、その思いは、そこに居たほとんどの人が同じような思いでいたのではないかと思  
います。それは、“流れるプール”に対する印象が、そこに居たほとんどの人の中に“面白  
そう”な予測を生み出すものだからです。この高まった気持ち、溢れ出る活気を最大限に発揮  
するには“流れるプールは最適だ”と思えたのです。

健太さんの掛け声で「ながれるプール♪」「ながれるプール♪」と言いながら、活気溢れ  
る渦が出来上がっていきます。その中にいるほとんどの人たちが、その時に既に次なる予測  
を抱きながら渦を作っていきます。それは、その渦に身を委ねて流される瞬間のことな  
のではないかと思います。私もプールの外から俯瞰しながらも、いつしかプールの中  
にいる人たちと一心同体のような感覚になり、その瞬間を待ちわびています。

きっとプールの中の人たちも、少しずつは違うのだろうけど、でも同じような予測を期  
待しつつ、渦を作っていたのではないかと思います。つまり、個々人バラバラで持つ予測や期  
待を超えて、みんなで持つ予測や期待に向かっているのです。言い方を少し変えると、個々  
人バラバラな予測や期待が響き合って、大きな一つの予測や期待が生まれていたのでは  
ないかと思います。

それを、十分に堪能し味わったあと、また一人一人に還っていくのです。一人一人に還  
っていくのですが、その高まりの心地よさを味わえば、再び戻りたくなくなってしま  
うような気がします。自分の輝きが起こした自分を越えた高まりですから、そう思  
うのだと思います。

それと同時に、見落としてはいけないことがあります。それは、「ながれるプールや  
ろう」と盛り上がった時に、プールからサッとプールサイドに上がった子がいます。  
きっとその子には、流れるプールに“面白そう”な予測が生まれなかったのだと思  
います。もしかしたら

“危ないかも”と思ったのかもしれませんが。そういう予測をもとに、自らプールを出たのです。

それと同時に、流れるプールの渦の中に居ながらも、壁に手を当てて慎重に歩く子がいます。“面白そう”なのだけど、ちょっと“危なそう”な予測が働いているのでしょう。

それと同時に、じゃぶじゃぶ池から、歓声を聞いて走って参入してくる年長さんもいます。今までは、響かなかったのだけど、「ながれるプール♪」に、じゃぶじゃぶ池とプールの距離を埋めるほどの強い“面白そう”な印象があったのでしょう。

それと同時に、縁側やステージ、園庭から眺めている子たちがいます。それぞれに水との距離感は違うとは思いますが、自分の置かれた状況と向き合いながらも、プールから溢れ出る面白そうな活気に引き寄せられています。

それと同時に、溢れ出る活気を感じながらも、園庭で泥遊びやおままごとをしている子、蝉取りをしている子、縁側やステージでごろごろしている子、部屋の暗がりでも過ごしている子がいます。その子たち一人ひとりも、自分の目当てと状況を対話させながらそれぞれに過ごしています。

もし、プールの中に“面白そう”と強く引き寄せられるものがあれば、自ら入っていくのだろうけど、そうしないのには、それぞれに様々な理由があるのです。

流れるプールが終わって、大きな渦が自然と消滅した後に、園庭の方に視線を向けると、年中さんの数名が美幸さん（4歳児担任）と一緒に、自分たちの洗濯した洋服をステージの柱に張ったロープに干しています。

私が「何やってるの？」と尋ねてみたら、ひかちゃんが嬉しそうに「どろんこやってよごれちゃったからせんたくしてるの！」と教えてくれました。

あのプールの大きな渦と同時に、園庭で泥遊びも盛り上がっていたようです。

後に、美幸さんにその時の様子を聞いてみました。

## 水との出会いの入り口を広げたいと思って

～美幸さん（年中児担任：20年目）～

丁度この時期に、同じ担任の麻友ちゃんと、水が苦手な子たちにとっての、水との出会いを広げてあげたいよね、と話していました。それは、昨年度年長担任をやって実感したことですが、年長になって水が苦手と思っている子は、それまでの水との出会いが少なかったからではないかと思ったからです。そういう状況の中で、その時になって、水の楽しさを味わってあげたいと思っても、子ども本人にとって辛いのではないかと思います。それは、ただ水が得意になって欲しいというような安易な考えではなく、水に身を委ねたり、水がかかるのを許せるってことは、水を“信じる”ことができればなりません。それは、水に留まらず、人（相手）に気を許すとか、身を委ねることに繋がっています。

それが年長になるまでできないということは、一番つらいのは子ども自身だと思うので、早いうちから、安心して心を許す・委ねられるようになって欲しいというか、心の構えを外

してあげたいという思いが根底にありました。

だから、そういう水が苦手な子たちにとっては、いきなりプールに入るのは、ハードルが高いただろうから、水との出会いを広げられるように考えたいと思って、麻友ちゃんと、泥遊びもあるよね、シャワーを浴びるのだって水との出会いだよね。おままごとでも水使うよね。と話していました。

そういう話し合いは、やらせ”とかではなく、あくまでも子どもの水との出会いを広げる為でなきゃいけない、それには、まず大人が楽しもうねとも話していました。

そんな矢先の日だったので、プールに向かう子どもたちに麻友ちゃんが付いていってくれたのを見た私は、園庭でおままごとをする子たちの仲間に入れてもらって、ちょっと思い切った水を使って遊んでみたら、意外とノリノリで乗ってきてくれたのでした。だんだん楽しくなって、洋服のまま泥んこ遊びになっていきました。もちろん、その子たちが乗り気じゃなかったら無理にやることではないとは思っていましたが、その時は、盛り上がったので、「このまま泥んこになって洗濯も遊びにしちゃったら面白そう」みたいな感じでやりました。

泥遊びをする私たちのところにも、プールの楽しそうな雰囲気が伝わってきていたので、それに触発されていたのもあると思います。

## 気運が高まって形を生み出していく

～鈴木 秀弘（副園長：保育歴11年目）～

きっと、美幸さんが、なにも意識していなかったら、そのまま流れていったおままごとだったのだと思います。担任同士で「子どもたちの水との出会いを広げてあげたい」と話し合っ

て意識していたから、おままごとが泥んこ遊びになっていったのだと思います。さらに、その子たちの気を大きくさせる要因の一つに、プールの盛り上がりの雰囲気が伝わってきていたこともありそうです。

プールに留まらず、園庭のそこら中がプールから溢れ出る雰囲気に包まれていたのです。

これは、35年前の保育の切り替えの時代に、先輩たちが「子どもたちの夏の遊びを盛り上げたい」という願いを持ちながら、泥んこや水の力をかりたり、プールがあったら“面白そう”と試行錯誤していた時間と、重なる部分があるのではないかと思います。

ビニールプールから泥んこ遊び、水たまり遊び、プールごっこ、プール作り、ジャブジャブ池づくりと、その都度々々の苦労や工夫で形作られてきた、和光の夏の遊び環境です。さらに、「おやじたちを子育てに巻き込みたい」という願いが、小さなご縁や出来事を生んでいって、いつしかおやじたちの中に「家一軒作れそう」という気運が高まってきて、その力を借りてプールやじゃぶじゃぶ池が出来上がっていきました。

前に、きっかけはみーちゃんたちが健太さんに「みてて」といったところから始まったと書きましたが、何かが起こりそうな気運は、もうすでにこの日が来たときには十分高まっていたのかもしれませんが。その気運の高まりが、みーちゃんを引き上げたともいえるかもしれません。

この日は暑い一日でした。その暑さの助けもあったと思います。8月の末は暑さの中に秋風を感じるような時期です。いつもなら、いつまでも水の中に入っていられないような時期ですが、この日は違いました。

しかも、この夏は、一段と暑い日が多かったので、思わず水場に引き寄せられる機会も多かった。冷たい水より温んだ水の方が、水に心身を預けやすい。そういう日が多かった。更にそういう条件と同時に、大人と子どもの信頼関係があったのです。

### 暖まった場の後押しされて

お昼になり、ほとんどの子がお飯を食べに向かっている中、年長さんの数名がまだプールに残って遊んでいました。先ほどまでのような活気はありませんが、なんだかいい感じの雰囲気は残っています。その雰囲気に後押しされて、ゆうた君が今までできなかった飛び込み（競泳のスタートのような飛び込み）に挑戦しようと、プールサイドに上がりました。きっと“今なら出来そう”と思えたのだと思います。

しかし、気持ちはあるのだけど、ちょっと尻込みしているような印象です。その様子をちょっと遠巻きから、健太さんやあん子さん、そして私が見ていましたが、声はかけずにゆうた君の様子をそれぞれ見ていました。すると、そこに、2歳児のお飯のお手伝いに入ろうと、幸枝さん（フリー保育士：保育歴30年目）が通りかかって、「ゆうた、膝まげてしゃがんで飛んでみなー」と声を掛けてくれました。すると、それを聞いてゆうた君はしゃがんでから、サッと水に飛び込みました。

その瞬間、プールに入っていた他の子も、健太さんもあんさんも幸枝さんも私も、一斉に歓声を上げました。ゆうた君も出来た自分に驚いている様子で、目を丸くしています。

更に、その次の瞬間、これまた飛び込みはおろか、つい最近まで水に潜ることもたどたどしかったるみかちゃんが、「わたしもやってみようかな〜」とプールサイドに上がったのです。これには、その場に居たみんなが、半信半疑でしたが、そのるみかちゃんの言葉に應える形で、幸枝さんが「じゃあ、ゆうたみたいにしゃがんでごらん」といいながら、るみかちゃんの背中に手を当てると、その途端に、るみかちゃんは自ら飛び込んでしまいました。

またまた、そこにいたみんなが一気に歓声を上げて、その歓声が保育園中に響き渡ります。

るみかちゃんもゆうた君みたいに目を丸くしながら、もう笑いが止まりません。

なんだか幸せな一日でした。

### まとまらないまとめ

私が事務仕事をしているところに、“楽しそうな”歓声が届いたので、いてもたってもいられずに、その渦に参加させてもらっただけのことですが、みんなと一緒に振り返ってみれば、随分と複雑に絡み合った出来事が、創発的に場の活気を高めていることが見えてきました。

このように、ある状況を一つ切り出したとしても、それは単片的なものではなく、様々なコトが複雑に絡み合っていて、関わり合っていて、作用しあっているのだと思います。

ですから、あの時のこのことがここに繋がっているというような、単純な因果論では結べないし語れないのだと思います。

ある夏のプールでの出来事を語ろうと思ったら、プールという場を説明しなければならぬことに気づき、それにはプールの成り立ちを語らなければならなくなりました、さらにそれを語るには、保育の切り替えや保育園の成り立ちも説明しなければならなくなりました。

また、プールで起こっていることの周りで起こっていることにも、目をむけなければならなくなりましたし、俯瞰した私の視点だけでは見えない、個々人のミクロな関りも見えてきました。さらに、その時を迎える前の関係性などの背景も絡んできました。

私は、当初“面白そうな”雰囲気しか見えていませんでしたが、よくよく見ていると、“危なそう”と慎重に振舞ったり、プールから離れていく動きもあったことに気づかされました。

見れば見るほど、分からなかったことが分かってきて、分かればわかるほど分からないことが増えてくる。

私たちが向き合っている保育の現場は、こういう場なのです。

## 第二部 理論編

久保 健太

### 第一章 役交替という主題

和光保育園の保育者たちが書いてくれた「みてての渦」の場面は、民主主義を考える上で、多くのヒントを与えてくれる。まずは「みてての渦」の場面が、どのような場面であったのか、保育者たちの言葉に沿って、振り返っておこう。本研究を、ここから読み始める人にも配慮して、丁寧に振り返っておく。

最初は「渦」ではなかった、プールでの遊びが、徐々に「渦」になっていく姿を、秀弘さんは、次のように描いている。

8月末のある日、私は2階で事務仕事をしていたら、園庭から「すごーい！」「みてて！」という声が聞こえてきました。その声色に楽し気な雰囲気を感じながらも、目の前の事務仕事を進めていると、その内に、「すごーい」「みてて」の声の量がどんどん増えて行って、さらに、始めはバラバラだったその声が、束なってやってくるようになってきました。

その声の主の一人は、年長担任の健太さんだということは、すぐに分かりました。とても嬉しそうに「すごーい」といっています。「みてて」と言っているのは年長さんが多そうだな？いや他にもいそうぞ！と、居てもたってもいられずに、窓から声のする方を眺めてみたら、プールの中で泳いでいる子と、それを周りで見ながら「いいぞ！いいぞ！」と応援する大人と子どもがいました。その活気が溢れ出る状況に、益々居てもたってもいられず引き寄せられて、私は急いで階段を下りてプールに向かいました。[本研究 p8]

同じ場面を、「渦」の中にいた健太さんは次のように描いている。

プールに入っていると背後からゆいちゃんに『みててー』と声を掛けられました。

私は『え？』と振り替えると、ゆいちゃんとみーちゃんが嬉しそうな表情で笑いながら手を繋いでいました。そして、二人は私の視線を確かめると、手を繋いだまま一緒に泳いで見せてくれました。

(略)

私は心の中から『すげえ！！』という声が湧き出てきました。みーちゃんとゆいちゃんは、そんな私の驚きに伝えてくれるかのように、何回も手つなぎ泳ぎを嬉しそうに見せてくれました。

(略)

すると、すぐ近くに居たのんちゃんたちが『私たちもやりたい！』と3～4人集まってきました。私は『ますます盛り上がるだろうなあ』とさらにワクワクしてきました。

何度かペアを交換しながらやる中で、私もその仲間に混ぜてもらい、手繋ぎ泳ぎを堪能させてもらいましたが、そのときに手を繋いで「安心感」と同時に“一緒”という「心が繋がっている感」を感じ、みーちゃんが楽しそうにそして得意な表情をしていた気持ちがちょっとだけ分かったような気がしました。[本研究 p10-11]

民主主義を考える上で、とくに、多くのヒントを与えてくれるのは、多くの子どもたちが、「渦」に参加していくという点である。その様子を、健太さんは次のように描いている。

どんどん盛り上がり、私もみーちゃんも含んだ 4 人で手を繋いでやってみようと言っていた時、楽しさが伝わっていたのか、傍にいたあん子さん(2歳)が「私たちにも見せて」と言ってくれて、4 人手繋ぎ泳ぎが広々とできるように、周りの子にも協力してもらって場所をあけてくれました。

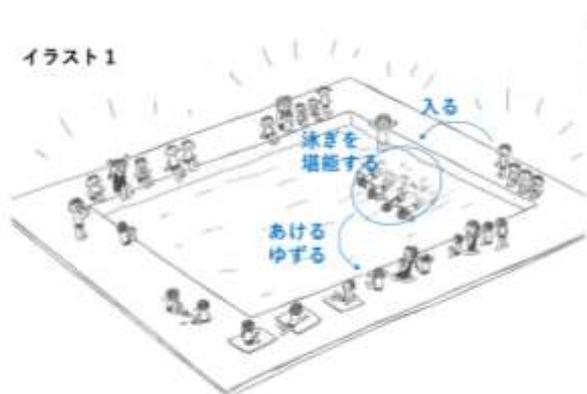
その広々とした空間で、みーちゃんや私たちは思う存分 4 人手繋ぎ泳ぎを堪能させてもらいました。

すると、私たちが顔を上げた途端に、周りでみていた子たちが「すごーい！」と驚いてくれて、次の瞬間には、「やりたい」「私もやれるよ」と、ウズウズと自信が身体中から溢れでていました。

「私たちもやっちゃおう！」と交替々でプールに入り、それぞれの得意な技を見せ合いました。その度に、「すごーい！いいぞ！いいぞ！」という歓声が湧き上がり、その度に「次は俺たち」「次は私たち」と、楽しい時間が続いていきました。[本研究 p11]

あん子さんたちが「場所をあけてくれ」という点は、ひじょうに重要である。そのおかげで、みーちゃんと健太さんたちは「思う存分 4 人手繋ぎ泳ぎを堪能」することができたからである。

これをイラストで描くと、次のイラスト 1 のように描ける。



あん子さんたちの「あける」、言い換えれば、ゆずるがあったからこそ、みーちゃんたちは「プールに入り」、「泳ぎを堪能」することができた。

秀弘さんは本研究の p16 で、役交替という言葉を使っているが、彼が役交替と呼んだ出来事の中では、このような「あける」と「入る」の交替が起きていたとも言える。

そして、この交替は「わたしたちもやっちゃおう！」を呼び込み、交替交替でプールに入り、それぞれの得意な技を見せ合うということが可能にした。

この「あける (ゆずる)」と「入る」の交替によって、多くの子どもたちの参加が可能に

なっている。そう言っても過言ではない。仮に、泳ぐ場所を占めていた子が、その場所を譲らなかったとしたら、他の子が、その場所に飛び込むことはできない。つまり、役割が固定されていたら、いつまでたっても、泳げない人は泳げない人のままである。

交替によって参加が可能になっている。「入る（堪能する）」という参加が、可能になっている。ここでは、この点を、強調しておきたい。というのも、参加こそ民主主義におけるキーワードだからである（詳細は補節「民主主義における参加の重要性」を参照）。

本論は、みてての渦の子どもたちが示してくれる「交替することによって、参加が可能になる」という姿から、「参加」を通じた民主主義を実現するためのヒントが得られそうだという見通しをもって、この場面を検討する。

しかし、子どもたちの姿を、理想化することには慎重でいたい。たしかに、大人になると、この「交替」はなかなか起きづらい。自分が堪能しているものを、他人に「ゆずる」ということは、なかなかしづらい。電車の席や、組織での役職など、自分が手にしたものを、他人に「ゆずる」ということはなかなかしづらい。

大人と子どもは、置かれた状況が異なるので、単純な比較には注意を要する。

だから本論では、子どもたちはどうして交替ができるのかを問うことで、広い参加を、どのように可能にするのかを考える上でのヒントは得るものの、そのヒントを、そのまま大人社会に当てはめることには慎重でいたい。

しかし、子どもたちの姿から、どのようなときに交替は可能であるのかを問うことは大切にする。あらかじめ、その問いに答えておこならば、①交替した方が、楽しさが続くから（ということは、そもそも楽しい状態であることが大事）、②譲っても、やりたいと言え、自分の番が来るからという2点が答えになろう。

と、ここまで述べた上で、しかし「どのようなときに交替は可能なのか」「どのようなときに、人はゆずることができるのか？」という問いに答えることは2019年度以降のテーマ（主題）にしたい。この問いに答えるためには、人間の「育ち」にかんする思想的考察が欠かせないので（つまり、上の問いに答えるには「どのような育ちが、交替をもたらすのか」という問いに答えることが欠かせないので）、人間が育つ<sup>たかし</sup>ということに関する大田堯、エリック・H・エリクソン、山竹伸二の思想をあらためて検討しながら、上の問いに答えたい。

本研究では、もうひとつ手前の問いを主題的に検討しておく。その問いとは「交替とは何か？」という問いである。

## 補節：民主主義における参加の重要性——本研究が「みてての渦」に注目する理由——

第一章では、参加が民主主義におけるキーワードであることを指摘したが、民主主義における参加の重要性について、詳しく述べることはしなかった。

以下、民主主義における参加の重要性を確認しておく。あわせて、民主主義の一形態としてのローカル・ガバナンスについても、その定義を確認しておく。

それらの確認によって、「ローカル・ガバナンスによる地域福祉に関する調査研究」の報告書として書かれている本研究が、なぜ「みてての渦」に注目するのか、また、「みてての渦」のどこに注目するのかを説明できるだろう。

結論的に言えば、「みてての渦」は、交替によって参加を可能にしている点で注目に値する。そして、本研究は「みてての渦」における交替に注目する。交替において何が起きているのか？交替は、なぜ可能になるのか？それらの点を明らかにしようとする。

とはいえ、それらの点は後ほど検討することとし、ここでは「民主主義とは何か？」「民主主義の一形態としてのローカル・ガバナンスとは何か？」「民主主義において、参加はどのように重要なのか？」という点に、簡潔に答えておく。それは、どうして「みてての渦」に注目するのかという問いへの答えでもある。

### 民主主義とは何か？

2016年の夏、ストックホルムの就学前学校を視察した際、教員のジェーン・ウェンズビー（Jane Wensbey）は「スウェーデンにおける教育の目的は、(学習者が)民主主義の担い手へと育つことだ」と語った上で、「民主主義とは、自分たちの手で自分たちの社会をつくることだ」と語ってくれた<sup>3</sup>。

この定義は、ひじょうにシンプルな定義だが、民主主義の本質を言い当てている。ジェーンの説明によれば、スウェーデンでは、民主主義をいったんこのように理解したうえで、以下の二つの問いを、議論しているのだという。

第一の問いは「自分たち」とは誰のことなのか？そこには誰が入るのか？子どもは入るのか？移民は入るのか？納税者しか入らないのか？住民しか入らないのか？という問いである。

第二の問いは「社会をつくる」とはどのようなことなのか？法律を決めることなのか？マンションの駐輪所の場所を決めることなのか？という問いである。

スウェーデンでは、これらの問いを、そのつど、議論しているのだと、ジェーンは語ってくれた。それらの問いを議論する際には、「自分たち」の範囲はなるべく開くように、また、

---

<sup>3</sup> 久保健太「スウェーデンを訪問して考えたこと」『関東学院大学教養学会年報 第9号』2017年3月、所収

「社会をつくること」になるべく参加しやすいよう、ごく身近なことから参加できるように、努力がされているということも語ってくれた。

この点は、一保育者であるジェーンの感想ではなく、学問的にも観察されている。スウェーデンを含めたデンマーク、ノルウェー、フィンランド、アイスランドの北欧諸国の政治、経済を網羅的に論じた『北欧学のフロンティア』の中で、岡澤憲英は北欧における民主主義（デモクラシー）がもつコンセンサス・ポリティクス（合意形成型の政治）の論理について、次のように述べている<sup>4</sup>。

「コンセンサス・ポリティクスの基本構図は、【説得→納得→合意→貢献】である。つまり、意思決定者が市民を、合理的根拠を基礎にして、説得し、市民が合理的に納得し、両者間で合意が形成される。市民は合意の結果として貢献を提供し、行政はその貢献の集積をサービスとして市民に戻す。」

保育の世界の読者にも伝わるように、以下、ジェーンの用語を用いて、岡澤の言葉を読み解いておく。

「民主主義とは、自分たちの手で自分たちの社会をつくることだ」といっても、何もかもを「自分たち」（岡澤のいう市民たち本人）でつくってはいは、どうしても時間がかかってしまう。そこで、専門家や代表者に、ルールや政策をつくってもらう。その専門家や代表者が「意思決定者」である。

その意思決定者たちは、市民に代わって、ルールや政策をつくる際に、市民たちが納得できるまで説得する。そうして、意思決定者と市民の間で合意がつくられていく。一度、合意が得られれば、市民は、そのルールや政策が、よりよく実現されるように協力・貢献する。行政は、協力・貢献の結果として生まれる「よりよい社会環境」を市民たちが味わい楽しめるように工夫する。

以上が、岡澤が述べるところのコンセンサス・ポリティクスの論理である。市民の「納得」が得られること。それが非常に重要なのである。では、市民の納得を得るために、意思決定者は、どのような工夫をしているのだろうか？その点について、岡澤は「納得を得る最初の作業は、市民生活の近くで意思決定すること、地方分権を促進することである。」と述べる。まさに、ジェーンのいう「社会をつくること」になるべく参加しやすいよう、ごく身近なことから参加できるような努力が、意思決定者によってなされているのである。

さらに岡澤は、次のように続ける。

「自分たちで決める」という原則は、デモクラシーを成熟させるためにゆずることのできない前提である。（略）北欧は、デモクラシーの実験室として大胆な発想を披露してくれ

---

<sup>4</sup> もっとも、同書の中で、小川由美が「スウェーデンを含む北欧諸国のデモクラシーがなぜ作動しているか、という説明としては、多数決型のロジックだけでも、コンセンサス型のロジックだけでも、十分説明しつくせない」と指摘していることを踏まえれば、コンセンサス・ポリティクスの論理だけで、スウェーデンのデモクラシーを理解することには慎重さをもつべきである（小川由美「第11章 北欧デモクラシー論再考」岡澤憲英編『北欧学のフロンティア』ミネルヴァ書房、2015年所収。P192）。

てきた。《開け・開け・もっと開け》の精神で、政治や行政が知恵と工夫の妙技を実演してみせた<sup>5</sup>。

意思決定者に、いったんは任せるとしても、やはり「自分たちで決める」が原則なのである。そして、「自分たち」の範囲を開いていく精神で、意思決定者も市民も「自分たちで決める」という原則を実現しようとしてきた。それがスウェーデンを含めた北欧諸国における民主主義（デモクラシー）の考え方なのである。

### ローカル・ガバナンスとは何か？

このような民主主義の考え方は、いくつかの民主主義の考え方の中でも、「ローカル・ガバナンス」の考え方に近いように見える<sup>6</sup>。

羽貝正美はローカル・ガバナンスを次のように定義している。

改めて簡単な定義を試みるならば「住民の自治、地域の自治と自己決定を重視し、同時に立案から評価に至る政策の循環過程に広く住民の参加・参画を促しながら、求められる自治体政策の実現を志向する自治体の自己統治のあり方、住民参加型自治の実践」と定義できるのではないだろうか<sup>7</sup>。

羽貝のこの定義も、しっかり読み解いておきたい。

この定義は、大きく三つの部分からなる。ジェーンの用語も踏まえながら、（また、本研究全体との関連も示しながら）羽貝の定義を丁寧に見ていく。

第一に「住民の自治、地域の自治と自己決定を重視し」の箇所。この箇所は、自治と自己決定の大切さを訴えている。自分たちのことは自分たちで決めること。これは自分のことを自分だけで決めること、とは違う。自己決定の「自己」は「自分」ではなく「自分たち」である。

「みてての渦」の子どもたちは、「自分」を發揮しつつも「自分たち」で、交替をしている。言い換えれば、順番を決めている。

---

<sup>5</sup> 岡澤憲英「北欧：ペリフェリーはニュー・フロンティアののぞき窓」岡澤憲英編『北欧学のフロンティア』ミネルヴァ書房、2015年所収。P6。

<sup>6</sup> 『現代政治理論』の「第6章 デモクラシー」と「第9章 公共性と市民社会」を参照すると、「新しいデモクラシー」として「ラディカル・デモクラシー」と「討議デモクラシー」が挙げられている。同書によると、ラディカル・デモクラシーのキーワードは「(要求の) 多元性」であり、討議デモクラシーのキーワードは「直接参加」「討議(対話)」「合意形成」である。このキーワードに沿って、ローカル・ガバナンスをデモクラシーに位置づけるならば、直接参加を重視し(かつ自己決定を重視し)ているのがローカル・ガバナンスだということになる。川崎修・杉田敦編『現代政治理論 [新版]』有斐閣、2012年

<sup>7</sup> 羽貝正美「結 住民参加型自治への展望」羽貝正美編著『自治と参加・協働』学芸出版社、2007年所収。p262。

見逃されがちだが、重要な点は、保育者の健太さんが順番を決めているのではない。あん子さんが決めているのではない。子どもたちが、自分たちで、順番を決め、交替しているという点である。

どうして、このようなことが可能になるのか。それは共振を土台に、自己決定をしているからだ——というのが、本論の仮説なのだが、その点についての検討は、エリック・H・エリクソンと大田堯の思想を絡めながら、第二部でおこなう。

ここでは、「自分だけ」ではなく「自分たち」で順番を決めている姿が、ローカル・ガバナンスの実践と通じるものだという点を、それゆえ、子どもたちのこの姿が、ローカル・ガバナンスの実践を考える上でも、ヒントをもたらすものであるということを確認するにとどめておく。

第二に「同時に立案から評価に至る政策の循環過程に広く住民の参加・参画を促しながら」の箇所。

ここに「参加」が登場する。では、何への参加か？「政策の循環過程」への参加である。循環過程とは、立案と評価の循環過程だが、噛み砕けば、「本人たちが、社会をどうするかについての政策を立案し、実施し、評価する。その評価に沿って、あらためて政策を立案し直し、実施し直し、評価し直す。そのプロセス」のことである。自分たちで決めて、行なって、評価する。そのプロセスに本人たちが参加することである。

ここに「みてての渦」が、どうして「民主主義」「ローカル・ガバナンス」を考える上で、重要な場面となりうるのかの答えがある。「みてての渦」の場面は、交替によって参加を可能にしている。それゆえ、そこで起きている交替をしっかりと検討することによって、参加を可能にするためのヒントを得たい——これが、本論が「みてての渦」の場面を取り上げる理由である。

第三に「求められる自治体政策の実現を志向する自治体の自己統治のあり方、住民参加型自治の実践」の部分は「第一の部分、第二の部分を通じて、本人たちが暮らす社会の政策を、本人たちが求めるものとすることをめざす社会のあり方」それこそがローカル・ガバナンスだということを述べている。この部分は、ジェーンの「自分たちの手で、自分たちの社会をつくること」という定義とそのまま重なるだろう。そのような実践を実現するための手立てが、第一の部分（すなわち、自分だけではなく、自分たちで決めること）であり、第二の部分（広い参加を可能にすること）である。

そう考えると、第二の部分の軸である参加は、ローカル・ガバナンスという社会の在り方において、ひじょうに重要なものであることがわかる。

以上が、民主主義における参加の重要性である。本論は、みてての渦の子どもたちが示してくれる、交替することによって、参加が（しかも、より広い参加が）可能になるという知

恵から、ローカル・ガバナンスを実現するためのヒントが得られそうだという見通しをもって、この場面を検討するものである。

## 第二章 分解と合成—福岡のモデルとつなぐ—

### 活力あるものどうしの交替

「交替とは何か？」この問いに答えるにあたって、まず着目したいのは、渦の場面で起きている交替が、活気、活力のあるものどうしの交替だという点である。

秀弘さんによる考察をあらためて、引用する。

私にはその時、一人一人の振舞いや溢れ出る活力を見ながらも、プールの中に集まった活気や流れるプールの渦が、まるで一つの生命現象のように見えていました。

一人一人から活気が溢れ出ていて、一人一人の輪郭をぼやかせています。プールという場に、目には見えないのだけど、でも確かに見える活気が溢れていました。

その活気がエネルギーとなって膨らんでいく。その活気に引き込まれていく周りがある。誰かに仕組まれて出来上がった形というよりは、活気が形を創っていくような感じがしたのです。

例えるならば、内海の渦潮や台風のような感じですか。

潮と潮がぶつかり合って出来る運動エネルギーが渦をつくる。その渦の運動エネルギーが周りの水を引き込み、引き込む力も強くなるから、渦という構造自体も大きくなっていく。

台風も同じです。温められた海水が蒸発し上昇流を生み、上空で冷やされた空気が下降流となって、上昇流と下降流の運動が対流となって渦を作ります。その渦の運動エネルギーが、更に周りの温かい空気を引き込みながら育っていく。だから海水温が温かければ温かいほど台風は大きくなって、長く維持し続けます。渦潮も、ぶつかり合う潮の流れが続けば渦の運動エネルギーや構造は維持されますが、それがなくなれば消滅します。こうやって、一定の入力のあるときにだけ、その構造が維持され続けるようなものを「散逸構造」というそうです。

つまり、私は、このプールの中で起こった出来事が、子どもたちの内から湧き出る活気が散逸構造を生み出しているように見えたのです。もしかしたら、それは「流れるプール」が、プールの中で渦のように流れを生み出すものだったから、渦潮や台風を連想しやすくしているのかもしれませんが、それだけでなく、確かに“子どもの活気”が上昇流と下降流を生み出して、その対流が渦となって大きな活気、まるで台風のような大きな運動エネルギーとなって育っていったのです。(本研究 p15 より 傍点 久保)

ここで注目したいのは、秀弘さんが「みてての渦」の子どもたちの姿を「散逸構造」のようだと書いている点である。科学雑誌である『別冊ニュートン 生命の科学』では、散逸構

造が次のように説明されている<sup>8</sup>。

外からエネルギーや物質をとり込み、その一部を熱として外に放出するような環境が整うと、自然と台風（渦巻き型の風）のような秩序だった構造ができあがることもある。このような構造を「散逸構造」と呼ぶ。

この散逸構造の中で「上昇流と下降流の役交替」が起きていると、秀弘さんは書く。その箇所も引用する。

見せる側と見る側の役交替をしながら、自分たちで活気の渦を回していきます。回していくというよりは、上昇流と下降流の役交替が、自然と渦を創っていくような感じです。その場に居た人たちは、自らが渦を創る要因でありながら、その渦のエネルギーを活用しているような感じがします。まるで台風のような感じです。[本研究 P16]

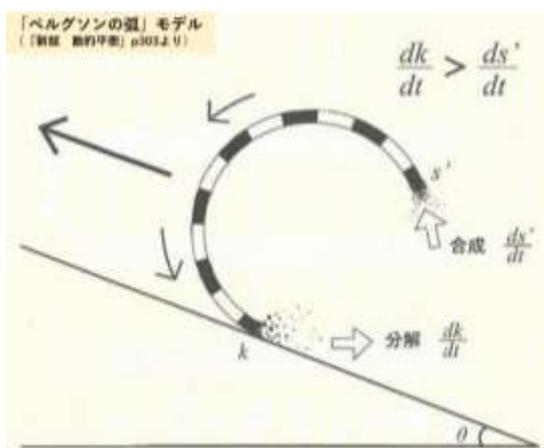
上昇流と下降流の役交替が、「まるで台風のように」に起きている。秀弘さんはそのようにこの場面をとらえている。一つ前の引用部分では「まるで一つの生命現象のように」とも書かれている。

本研究は、秀弘さんによるこの直観を活かす。そのために、一つの試みをしようと思う。その試みとは、生命科学のモデルで、子どもたちの交替を読み解くという試みである。

本研究では、福岡伸一による「ベルグソンの弧」のモデルを用いて、交替とは何か？という問いへの答えを探求する。

### 「ベルグソンの弧」モデル

福岡による「ベルグソンの弧」モデルとは、下の図のようなものである。



この図を読み解くためには、福岡の生命観を理解する必要がある。また、「動的平衡」という福岡のキーワードを理解する必要がある。それらについて、福岡自身が述べた文章を、少々長くなるが引用する。

「私たちが毎日、タンパク質を食物として摂取しなければならないのは、自分自身の身体を日々、作り直すためである。シェーンハイマーはこの事実を鮮やかな実験で初めて

示した。たとえば私たちの消化管の細胞はたった二、三日で作り返えられている。一年も経

<sup>8</sup> 『別冊ニュートン 生命の科学』ニュートンプレス、2014年。P88

つと、昨年、私を形作っていた物質はほとんどが入れ替えられ、現在の私は物質的には別人となっているのだ。つまり、生命は絶え間のない分子と原子の流れの中に、危ういバランスとしてある。私が自らの生命論のキーワードとしている「動的平衡」である。それまで静的なものとして捉えられてきた生命観に、シェーンハイマーは、新しいパラダイム・シフトをもたらしたのだ。

動的平衡の流れをつくり出すためには、作る以上に壊すことが必要である。それゆえ細胞は一心不乱に物質を分解している。(略)

生命にとって重要なのは、作ることよりも、壊すことである。細胞はどんな環境でもいかなる状況でも、壊すことをやめない。むしろ進んで、エネルギーを使って、積極的に、先回りして、細胞内の構造物をどんどん壊している。なぜか。生命の動的平衡を維持するためである。

秩序あるものは必ず、秩序が乱れる方向に動く。宇宙の大原則、エントロピー増大の法則である。この世界において、もっとも秩序あるものは生命体だ。生命体にもエントロピー増大の法則が容赦なく襲いかかり、常に、酸化、変性、老廃物が発生する。これを絶え間なく排除しなければ、新しい秩序を作り出すことができない。そのために絶えず、自らを分解しつつ、同時に再構築するという危ういバランスと流れが必要なのだ。これが生きていること、つまり動的平衡である。」<sup>9</sup>

以上が、福岡からの引用である。

途中出てきた「エントロピー増大の法則」とは、「宇宙のすべての現象は乱雑さが増える方向にしか進まない」という法則のことを言う。熱いものが冷めることや、整頓されていたものが乱雑になること、すなわち「高エネルギーの状態がエネルギーを放出してやがては低エネルギーの状態になること、あるいは、秩序の高い状態が徐々に崩壊して秩序の低い状態に陥ること」もエントロピー増大の一種である<sup>10</sup>。

生命も例外なく、この法則の影響を受ける。すなわち、いまある生命体も放っておけば、必ず壊れる。それゆえ、生命は、壊れる前に、自らを壊す。自らを壊すことで、自らを作る。

すなわち、生命は、壊れる前に壊し、作る。そのことによって、自らの生命を持続させている。そのさまを示したのが、先のモデル図なのである。モデル図では、分解と合成を繰り返す弧が、坂を登り返そうとしている。放っておくと、坂を転がり落ちてしまう。いわば、この坂は、放っておくと生命体が壊れてしまうことを（つまりは、生命体に働くエントロピー増大の法則を）示している。

生命は、自らを分解しつつ、同時に再構築、すなわち合成することを絶え間なく繰り返すことで、坂を登り返しているのである。そして、「坂を登ろうとする努力が尽きたとき、細胞もしくは個体は死を迎える。つまり坂の下方にずるずると引きずり降ろされ、奈落の底—

<sup>9</sup> 福岡伸一『新版 動的平衡』小学館新書、2017年。p297。

<sup>10</sup> 福岡伸一『新版 動的平衡』小学館新書、2017年。p285 および p287。

「つまりエントロピー増大が極まった熱力学的な死の状態——に落ちる」<sup>11</sup>。

以上の生命観を、福岡は次のようにシンプルにまとめている。

「動的平衡というのは絶え間なく移りゆきながら、絶えず自分を更新していると言いますか、「合成と分解」「酸化と還元」を繰り返しながらエントロピー増大の法則に対抗している仕組みである」<sup>12</sup>。

本研究は、福岡による「ベルグソンの弧」モデルを使って、交替とは何か？という問いへの答えを探求する。

### 「ベルグソンの弧」モデルを用いる理由

福岡のモデルを用いるのには、5つの動機、理由がある。

第一に、秀弘さんの直観を説明し、展開するのに有効なモデルであること。先に示したように、秀弘さんは、子どもたちの姿が、散逸構造をなしていると看取した。のみならず「まるで一つの生命現象のよう」だとも書いた。

秀弘さんのなかでは、散逸構造と生命現象が結びついているわけだが、その直観は、生命科学によって裏づけられてもいる。先に、「外からエネルギーや物質をとり込み、その一部を熱として外に放出するような環境が整うと、自然と台風（渦巻き型の風）のような秩序だった構造ができあがることもある。このような構造を「散逸構造」と呼ぶ」という『ニュートン』誌の解説を引用したが、誌面では、その引用部分に続けて、次のように記されている。

外部からエネルギーや物質をとり込み、一部を外に排出することで、秩序だった構造をつくる。これは生物が生きている状態そのものだ。現在、多くの科学者は、散逸構造の理論は、生命の原理を物理学的に説明するのに有用であると考えている。

生命とは何か——この問いに対して、現在の科学が出した答えの一つは「生命（生命体）とは、外部とエネルギーや物質をやり取りすることで秩序だった構造（散逸構造）をつくり、維持する存在である」というものだ。（傍点引用者）<sup>13</sup>

散逸構造のモデルによって、生命現象をとらえようとする秀弘さんの直観は、まったくもって正しいのである。引用文によれば、散逸構造と生命現象の共通点は、「外部からエネルギーや物質をとり込み、一部を外に排出することで、秩序だった構造をつくる」という点にある。この点を、ニュートン誌は、エントロピー概念を用いて「外から得た物質やエネルギーを使って秩序だった構造をつくる（エントロピーを減少させる）ことで、放っておくと自然にふえるエントロピーを、何とかふえないように維持している」と説明している<sup>14</sup>。福岡の生命観とそのまま重なる生命観である。それもそのはずで、この生命観は、物理学者シュ

<sup>11</sup> 福岡伸一『新版 動的平衡』小学館新書、2017年。p286。

<sup>12</sup> 池田・福岡『福岡伸一、西田哲学を読む』明石書店、2017年。p171。

<sup>13</sup> 『別冊ニュートン 生命の科学』ニュートンプレス、2014年。P88

<sup>14</sup> 『別冊ニュートン 生命の科学』ニュートンプレス、2014年、p86。

レディンガーの生命観として記されたものであり、その生命観は、福岡に強く影響を与えているのである<sup>15</sup>。

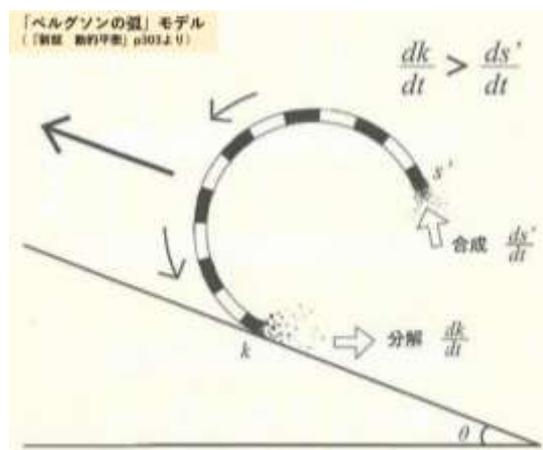
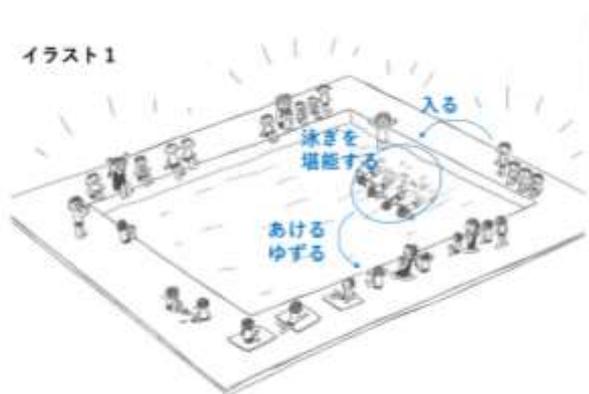
ということは、福岡のモデルと、秀弘さんの直観は、外からエネルギーをとり込み、それによって構造を維持するものとして、生命体を見るという点で重なる。そして、秀弘さんの直観は、みてての渦の子どもたちがエネルギーをとり込むことで、その活動を維持していることを見抜いていた。その直観を説明するのに、福岡のモデルは格好の素材となることが期待できる。この点が、福岡のモデルを使う一つ目の理由である。

二つ目の理由は、「交替とは何か？」を探究するのに、非常に多くの教示を与えてくれるモデルである点である。

前節では、子どもたちが行う交替を「あける」ことで「入り」「堪能」することだとした。そこでは「あける」と「入る」の交替が起きていると述べた。

この「あける」と「入る」は、福岡のモデルでいう「分解」と「合成」にあたる。「壊す」と「作る」と言い換えてもいい。

生命が自らの構造を「分解」し、それによって新たな「合成」を呼び込むこと。この「分解」と「合成」の交替は、子どもたちにおける「あける」と「入る」の交替に、重なるところが大きい。この重なりを検討することで、交替の中身を、より正確につかむことが期待できる。これが、福岡のモデルを用いる第二の理由である。



三つ目の理由は、教育学者である大田<sup>たかし</sup>堯の思想を継承できるということ。論の都合上、まだ登場していないが、本研究において大田の思想は大きな役割を果たす。その大田は「福岡伸一さんの書かれたものを何度も繰り返し読ん」だと述べた上で「生命は、流れ続ける川のような、自然の循環系の機能そのものというべきもので、動的平衡体ともいわれています。ですから学習というのは流れていく人生そのもの、新しい問題になって問いが続いていきますから、生涯にわたって未完成ということなんです。」と述べている<sup>16</sup>。すなわち、生命は

<sup>15</sup> 福岡自身が、著作の随所で、シュレディンガーからの影響を言明している。たとえば『生物と無生物のあいだ』講談社現代新書、2007年。第八章など。

<sup>16</sup> 大田堯、山本昌知『ひとなる』藤原書店、2016年。p50 および p53。

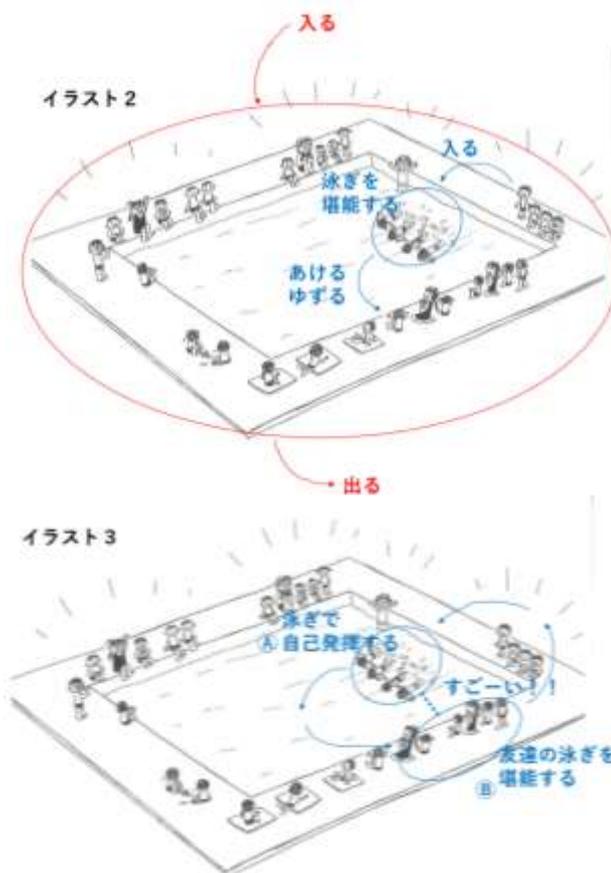
動的平衡という流れ（動き）であるがゆえに、問いが更新され、それゆえ学びが続く——大田はそう考えているのである。

福岡自身のモデルを用いることで、大田のこの思想を継承しうる。その点が、第三の理由である。

第四の理由は、時間の観点を組み込めるモデルであること。例えば、弧が進むスピードの速さや遅さ、リズムという観点を導入できるモデルであること。本研究では、十分に展開することはできないが、あける（ゆずる）のが早すぎれば入る子が急かされてしまうし、入る子が早すぎれば、あける子が急かされてしまい、ゆったりと堪能することができなくなる。この状態は、合成に対して分解が早すぎたり、分解に対して合成が早すぎたりする状態と言えるわけだが、福岡のモデルは、そのような状態を議論に組み込むことができるモデルである。これが第四の理由である。

第五に、さまざまなヴァリエーションのモデル図へと展開しうるモデルであること。2019年度以降の研究では、弧が入れ子構造をなしているモデルや（イラスト2）、弧どうしが響きあっているモデルを提示する予定であるが（イラスト3）、福岡のモデルは、そのようなヴァリエーションを展開させるモデルである。それは「堪能」のさまざまなヴァリエーションを提示しうるということでもある。2018年度の研究では、子どもたちが泳ぎを堪能する場面を検討するが、人間の生活に起きる「堪能」はそれだけではない。もう少し、穏やかな堪能もある。例えば、縁側に座って、暮れなずむ夕陽を眺めるような堪能である。また、泳ぎを堪能する子は交替していくが、交替せずに、一緒に堪能する場合もある。

そうした様々な堪能を 2018 年度の研究で主題とすることはできないが、いずれ主題的に論じる際にも、有効なモデルとなり得ること。これが福岡のモデルを用いる第五の理由である。



## 生命科学と人文科学をつなぐ

以上が、福岡のモデルを「交替」の検討に導入しようとする理由であるが、導入にあたっては困難もある。その困難の一つは、生命科学と人文科学の架橋に伴う困難である。

とはいえ、この架橋は、福岡自身が試みている。福岡の研究は（池田善昭の力添えも多大であるが）、生命科学と人文科学をつなごうとする大きな仕事である。本研究は、その仕事の力を借りる。

福岡は、池田の多大な力添えを得ながら、自身の生命科学と、西田幾多郎<sup>にしだきたろう</sup>の哲学を架橋しようとしている。その際、先のモデルにも含まれている「分解」と「合成」を西田哲学の概念を踏まえて定義している。

福岡のモデルを用いる第三の理由を述べた際に、分解と合成が、それぞれ（交替における）「あける」と「入る」に対応していることを指摘した。福岡自身による分解と合成の定義を確認する作業は、交替を、より詳細に分析しようとする本研究には欠かせない作業である。

まずは、福岡による分解と合成の定義を確認するところから始める。とはいえ、先述のように福岡の定義は西田哲学を踏まえた定義なので、福岡の定義を理解するためには西田哲学の理解が欠かせない。

それゆえ、まずは西田の世界観と概念を確認する。

## 西田の世界観と概念

西田の世界観は、難解だが、本研究においても重要な世界観であるので、多少、時間をかけて確認する。

読者のみなさんと確認したいのは「全体的一と個物的多」「絶対矛盾的自己同一」「時間と空間」という西田の世界観である。以下、順番に確認する。

### 【全体的一と個物的多】

まずは「全体的一と個物的多」という世界観について。

小坂国継<sup>こさかくにつぐ</sup>の比喻を借りれば、全体的一と個物的多の関係は、手と指の関係に例えることができる。手という全体は、指という個物からなり、指という個物は、手という全体の一部となる<sup>17</sup>。

もちろん、腕が全体だとすれば、手は個物となる。その場合、腕という全体は、上腕、前腕、手という個物からなり、手という個物は、腕という全体の一部となる。

全体だと思われたものが、実はより大きな全体の中の個物として働いていたり、もしくは、個物だと思われたものが、より小さな個物を要素とする全体として働いていたりするという「入れ子構造」が、ここにはある。

この点については、福岡による次の説明が分かりやすい。

<sup>17</sup> 小坂国継『西田幾多郎の思想』講談社学術文庫、2002年。p46。

「一と多」。

これは「全体と要素」と訳したい。

個体（全体）と細胞（要素）である。あるいは、細胞と分子、分子と原子・素粒子、と次元を下ることができる。また、生態系と個々の生命体（個体）、太陽系と地球、あるいは全宇宙と太陽系、というふうに次元を拡張することもできる。いずれにしても世界は入れ子構造としてある<sup>18</sup>。

「全体的一と個物的多」という西田の世界観において重要なのは、個物と個物が互いに影響し合う（西田は、限定し合う、と呼ぶ）という点であり、かつ、そうした個物の運動がそのまま全体の運動でもあるという点である。その点についても、小坂の説明を引用する。

「手と五本の指の動きは全く別のものではない。手が動くということは指が動くということであり、指が動くということは手が動くということである。たとえば、一つの指が動くとき、その指の動きは必ず他の指の動きに影響を与える。したがって、一つの指が動くとき、ただその指だけが動くのではなく、それによって同時に他の指も動くのである。すなわち五本の指は相互に限定し合う。そしてそれが、手が動くということの意味である」<sup>19</sup>

指と指といった個物どうしが影響し合いながら、それぞれ動いている。そうした個物の動きが、全体の動きそのものでもある。「みてての渦」の子どもたちで言えば、渦の一角で泳ぎを堪能している個物としてのみーちゃんは、手を握ってくれている個物としてのゆいちゃんと影響し合いながら、それぞれに動いている。そうした個物としてのみーちゃんやゆいちゃんの動きが、渦全体の動きそのものでもある。そのように世界を見る見方が、西田の「全体的一と個物的多」という世界観である。

#### 【絶対矛盾的自己同一】

今述べた、個物どうしが影響し合いながら動き、その動きが全体の動きそのものでもあるという世界について考える際、西田は「絶対矛盾的自己同一」という言葉を用いている。

この難解な用語を、櫻井歓は、以下のようにわかりやすく解説してくれる。少し長くなるが、引用する。

「絶対矛盾的自己同一」とは、一言でいえば、絶対に矛盾するもの、対立するものが、その矛盾や対立はそのままに、全体として一つのまとまり（自己同一）を保っていることを意味している。この時期に（西田が、その生涯の晩年に：引用者注）彼が思索のキーワードとしていた言葉だ。

<sup>18</sup> 池田・福岡『福岡伸一、西田哲学を読む』明石書店、2017年。p186。

<sup>19</sup> 小坂国継『西田幾多郎の思想』講談社学術文庫、2002年。p46。

西田は、現実の世界は絶対矛盾的自己同一の世界だと考えていた。

現実の世界とは、インコが<sup>さえず</sup>り、コスモスが花を咲かせ、夕日が沈んでいく、そのような場所だ。そこでは、インコは動物で、コスモスは植物で、夕日は天体の現象のことで、それぞれは別々のものである。この意味でそれらは対立している。

また、人と人との関係を、あなたと私との関係として考えてみるとどうだろう。あなたと私とは別々の人格であって、決して同じではない。相手のことを完全に理解することはできない。そうでありながら、互いに語り合ったり、笑い合ったり、喧嘩もしたりする（略）

さらに、こんなことも考えてみたい。昨日の私と今日の私とは、果たして同じ私なのだろうか。日記を書く人には思い当たるところがあるかも知れないが、自分が昨日書いた文章を読んで、不思議な気持ちになったことはないだろうか。昨日はこんなことを書いている。今日は昨日とは全然違う気持ちだ。昨日書いたことを取り消したいような気持ちだ。そんな経験はないだろうか。昨日の私と今日の私とは、対立している別人であるかのようだ。

いくつか例を挙げてみたが、世界には対立すること、矛盾することがたくさんある。けれども、そんな矛盾や対立は矛盾や対立のままに、丸ごと包み込むようにして、世界は一つのまとまりのある世界を作っているのだ。絶対矛盾的自己同一とは、そのようなことを意味している。世界のなかには、多様なもの、異質なもの、矛盾するもの、対立するものがあるけれど、それらはすべて、それぞれの形で世界を表現している。それによって世界は世界自身を形作っているのだ。

つまり、インコはインコとして、コスモスはコスモスとして、夕日は夕日として、それぞれの形で世界を表現している。また、あなたはあなたとして、私は私として、それぞれの形で世界を表現しているのだ。世界は、それらの表現を通して、自己自身を作っている。こう考えるのなら、私は世界のなかの一部として世界を表現し、それによって世界を形作っているといえる。<sup>20</sup>

以上が櫻井による解説である。個物は個物として、それぞれの形で全体としての世界を表現し、全体としての世界は、個物の表現を通して、世界全体を表現している。そのとき、個物どうしは「別々のもの」ではあるのだが、その別々のものは、別々のまま、「一つのまとまりのある世界」を作っている。「別々のまま」だからこそ、「一つのまとまりのある世界」を作ることができている。そう言ってもいい。

「みてての渦」で言うならば、個物としてのみーちゃんやゆいちゃんが、渦全体の盛り上がり表現し、渦全体の盛り上がりは、個物としてのみーちゃんやゆいちゃんを通じて、渦全体を表現している。そのとき、みーちゃんという個物の表現は、渦全体の盛り上がり表現してはいるのだが、しかし、他の誰でもない個物としてのみーちゃんによる表現である。そう言ってもいい。

その点については、櫻井による次の文章も参考になる。

---

<sup>20</sup> 櫻井 欽『西田幾多郎 世界のなかの私』朝文社、2007年。p140-142。

「私たちは世界のなかにおいて、一人ひとりそれぞれ世界の一部分となっている。そして、一人ひとりみんな違った形で、それぞれにただ一つの個として、この世界を表現しているのだ。一人ひとりが違うからこそ、それだけ世界は多様であって、世界が豊かに表現されるのだ。」<sup>21</sup>

個物は、それぞれに異なり、矛盾しているからこそ、それぞれの仕方、一つのまとまりのある全体を表現している。それが絶対矛盾的自己同一の世界観である。秀弘さんの「その場に居た人たちは、自らが渦を創る要因でありながら、その渦のエネルギーを活用しているような感じがします。まるで台風のように。」(本研究 p16) という考察は、みてての渦で起きていたことを、絶対矛盾的自己同一の世界観で描いたものだとも言えるだろう。

### 【時間と空間】

最後に「時間と空間」という世界観について。

先ほど述べたように、「みてての渦」の中では、個物としてのみーちゃんやゆいちゃんが、渦全体の盛り上がり表現し、渦全体の盛り上がりは、個物としてのみーちゃんやゆいちゃんを通じて、渦全体を表現している。そのとき、みーちゃんという個物の表現は、渦全体の盛り上がり表現してはいるのだが、しかし、他の誰でもない個物としてのみーちゃんによる表現である。

この場合、みーちゃんには、2つの作用が働いている。

一つは、渦全体の盛り上がりのみーちゃんに及ぼす作用。そこでは、全体の盛り上がりのみーちゃんに浸み込んだり、注ぎ込んだりしている。

もう一つは、個物としてのみーちゃんが、個として、自分を表現する作用。そこでは、ゆいちゃんとは別のかたちで盛り上がり表現するみーちゃんの姿がある。ゆいちゃんと同じ盛り上がり共有し、その盛り上がりのみーちゃんにも注ぎ込んでいたとしても、ゆいちゃんとは別の姿で、みーちゃんは盛り上がり表現する。そこには個としてのみーちゃんがいる。

西田は、みーちゃんに働くこの2つの作用を、それぞれ時間の働き、空間の働きに対応させる。

まず、第一の作用。

みーちゃんがいかに個であっても、そこには絶えず全体からの影響が注ぎ込んでいる。西田流に言えば、個は全体からの「限定」を受けている。そこでは、個がいくら個であろうとしても、「個物的多から全体的一へ」という全体への方向が働いてしまう。この「個から一へ」の働きを、西田は、時間の働きと見る。

---

<sup>21</sup> 櫻井欽、前掲書。p153。

西田自身の言葉を借りれば、「何処までも多の自己否定的一として時間的に（略）、形が形自身を形成し行く世界である。」<sup>22</sup>

次に、第二の作用。

みーちゃんが、いかに全体からの影響を受けていようとも、影響の浸み込み方も、影響を表現する仕方、みーちゃん独自のものである。その意味で、みーちゃんは、全体から独立した個である。

そこでは、全体を共有しつつも、どうしても、個としてのみーちゃんが際立つ。これが「全体的一から個物的多へ」の働きである。この「一から個へ」の働きを、西田は、空間の働きと見る。同じ時間を共有していながら、みーちゃんとゆいちゃんは、別々の空間に位置取りせざるを得ない。空間は、どうしても、個物が、個どうしとして相容れないことを際立たせる。それが、空間の働きである。

西田自身の言葉を借りれば、「何処までも一の自己否定的多として空間的に（略）、形が形自身を形成し行く世界である。」<sup>23</sup>

「個から一へ」が時間の働き、「一から個へ」が空間の働き。時間と空間の働きは、それだけではない。

「みてての渦」の場面を用いて、時間と空間の働きを、それぞれ考えてみる。

「みてての渦」の場面では、見られる側、もしくは見る側へと、みーちゃんやゆいちゃんを定めるのは、空間の働きである。そこでは、みーちゃんやゆいちゃんは、それぞれ個々の空間へと位置づき、他の誰も、その位置を占めることはできない。

つまり、空間には、動きの中にある個物を、個々の空間へと位置づける働き、言い換えれば、個々の空間へと「定める」という働きがある。

しかし、こうして定まった個物を、時間は動かす。見られる側にいたみーちゃんを、見る側へと動かし、見られる側にいた別の子を、見る側へと動かすのは、空間ではなく、時間である。

つまり、時間には、個々の空間へと定められた個物を「動かす」という働きがある。

空間は「定め」、時間は「動かす」。このような空間と時間の働きについて、西田は「永遠に動き行くものは、永遠に決定せるものとして、絶対空間的に、（略）、永遠に決定せるものは、永遠に動き行くものとして、絶対時間的に、（略）表現せられて有るものである。」と述べている<sup>24</sup>。

以上の、時間と空間の働きを表にすると、次のように整理できる。

---

<sup>22</sup> 西田幾多郎「生命」（初出は『哲学論文集 第七』1946年）。『西田幾多郎生命論集』書肆心水、2007年 p35-36。もしくは『西田幾多郎全集 第十一巻』岩波書店、1949年、p312-313。

<sup>23</sup> 「生命」p35-36、全集ならば、p312-313。

<sup>24</sup> 「生命」p35-36、全集ならば、p312-313。

表1：時間と空間の働き

時間	空間
個物的多を全体的一へ	全体的一を個物的多へ
動かす。動き行く。	定める。決定する。

以上が、西田の「時間と空間」の世界観である。

### 福岡による「分解」「合成」の定義

福岡は「全体的一と個物的多」「絶対矛盾的自己同一」「時間と空間」という西田の世界観を踏まえて、分解と合成を定義している。福岡によれば、分解は空間に、合成は時間に、それぞれ対応する。福岡自身が分解と合成の定義を行なっている箇所を引用する。

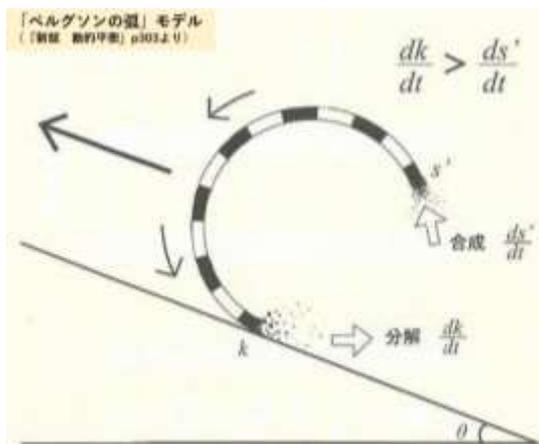
「一と多」

これは「全体と要素」と訳したい。

個体（全体）と細胞（要素）である。あるいは、細胞と分子、分子と原子・素粒子、と次元を下ることができる。また、生態系と個々の生命体（個体）、太陽系と地球、あるいは全宇宙と太陽系、というふうに次元を拡張することもできる。いずれにしても世界は入れ子構造としてある。

「一から多」は、全体から要素へ流れる方向をいう。分解、酸化（燃やしてエネルギーを得る）、切断（落葉、消化、分裂など）など、秩序が壊される方向をこう呼ぶ。つまり絶え間なく、ちぎれ、つぶされ、拡散される、ということ。『方丈記』冒頭の、「ゆく水の流りは絶えずしてもとの水にあらず」という観照。分解され、拡散していく、という方向性は、空間的に広がるものとしてある。つまり西田のいうところ「空間の形式」と呼ぶことができる。

「多から一」は、上記の逆反応。要素から全体が形成される方向をいう。合成、還元（光合成や高分子の構築はすべて酸化反応の逆）、結合（芽吹き、膜融合など）、秩序が構築される方向をこう呼ぶ。分解の方向、つまりエントロピー増大の方向に対して、エネルギーを使ってあえてこの坂を登り返すことによってバランス（平衡）をとる働き。秩序が構築される、という方向性は、時間が構築されるということと同義である（と思われる）。つまり西田のいうところ「時の形式」と呼ぶことができる。（傍点引用者）<sup>25</sup>



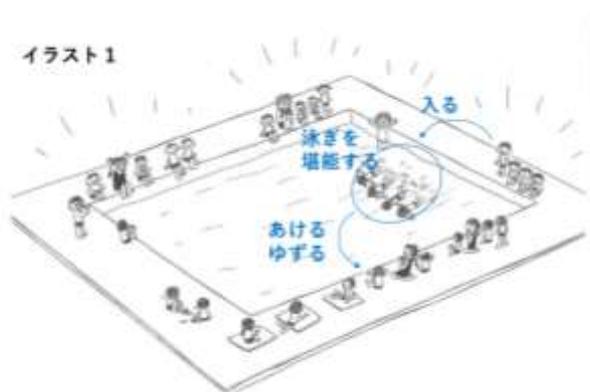
福岡は、「一から多へ」という方向をもつ「空間の形式」が分解に対応し、「多から一へ」と

<sup>25</sup> 池田、福岡、前掲書。p186

いう方向をもつ「時間の形式」が、合成に対応するという。たしかに合成は、個物的多を全体的一へと構築する働きなのだから、「多から一へ」という方向において、合成が時間の形式に対応するというのはわかる。同様に「一から多へ」という方向をもつ分解が、空間の形式に対応するというのもうなずける。

### 福岡の定義の修正

しかし、福岡の定義は修正する必要があると思われる。



第一に、福岡が時間の形式を割り当てた「合成」においても、明らかに「定める」「決定する」という空間の形式が働いている。福岡のモデル図を見ても、合成された個物は、弧の中で、それぞれの位置を決められている。それはみてての渦の場面でも同様で、みーちゃんが、手繋ぎ泳ぎを堪能する役へと入っていくとき、4人組のどこに位置取るか(すなわち、どの位置を占め

るか)は、決められている。それは、みーちゃんが占める、みーちゃんだけの空間として、決められている。これは空間の働きである。

そう考えると、合成においても、時間の作用のみならず、空間の作用が働いていると考えた方がよい。

第二に、福岡が「空間の形式」を割り当てた「分解」においても、「個物的多から全体的一へ」という「時間」の方向が、わずかにでも働いている。福岡のモデル図において、分解された個物は、弧から離れたとしても、弧から無関係ではない。みてての渦の場面でも同様で、みーちゃんが、手繋ぎ泳ぎを堪能する役から退いたとしても、プールの中で堪能している子からまったく無関係になったわけではない。見る側にまわったのだとしたら、みーちゃんが発する「すごーい！！」という歓声は堪能している子に何らかの影響を与えるわけだし、仮に、堪能している子を見ることもなく、「すごーい！！」を発することもないとしても、それはそれで、堪能している子に何らかの影響を及ぼす(その影響が、極めて小さいとは言え)。

つまり、合成においては強く働いている「個物的多から全体的一へ」という時間の形式は、分解において「全体的一から個物的多へ」という空間の形式へと反転したわけではない。分解においては「個物的多から全体的一へ」という時間の形式が、あまり働かなくなっただけなのである。

福岡の定義に、以上の二点の修正を施し、分解と合成を定義すると、

合成：「多から一へ」という時間の形式が強く働かなかで、個物ごとの空間を定めるという空間の形式が働くこと。

分解：「多から一へ」という時間の形式があまり働かないなかで、個物ごとの空間を定めるという空間の形式が働くこと

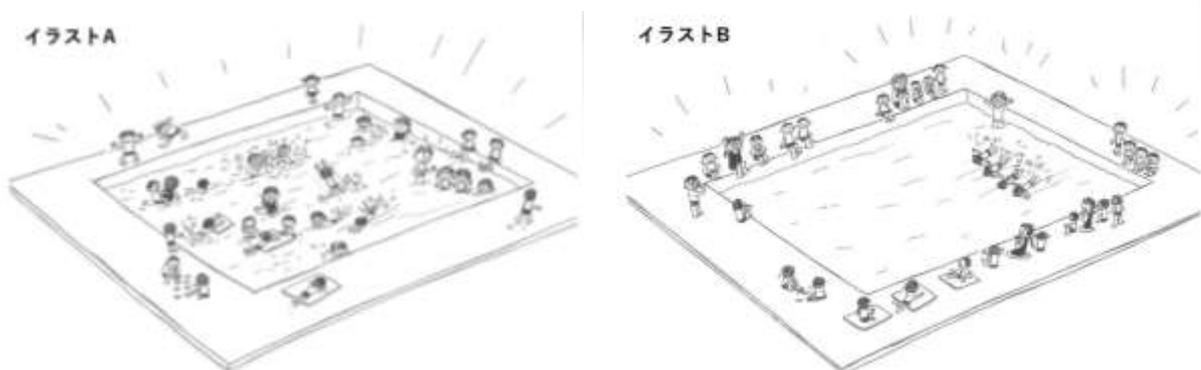
となろう。

定義して、早々に申し訳ないのだが、この定義は、非常にあいまいである。どこがあいまいかという、合成においては、時間の方向が「強く働き」、分解においては、時間の方向が「あまり働かない」という箇所があいまいである。時間の方向が「強く働く」とはどういうことか？逆に「あまり働かない」とはどういうことか？その点が、非常にあいまいである。

結論的に言ってしまえば、このあいまいさが一掃されることはない。個物が全体的一から、いくら逃れようとしても、完全に逃れることはできず、「個物的多から全体的一へ」の方向は、何らかの形で残り続けるからである。言い換えれば、「個から一へ」という時間の形式は、何らかの形で、個物に働き続けるのである。

つまり、時間の形式が、どれくらい働くかは、程度の問題なのである。まったく働かないという状態がない以上、その働きは「どれくらい働いているか」という程度ではかるしかない。

とはいえ、程度をはかる際の指標はあるはずである。みてての渦の場面で言えば、イラストA（左）の状態と、イラストB（右）の状態は何かが違うはずである。



イラストAには時間を共有している感じがなく、プールという空間を共有しているが、一つの活動（全体的一）を共有しているようには見えない。いわば、同じテーブルについてはいるものの、バラバラのことをしている感じである。

それに対して、イラストBでは、空間を共有しているだけでなく、一つの活動（全体的一）を共有しているように見える。同じ活動の中で、同じ時間を過ごしているように見える。いわば、同じテーブルについて、一つのことをしている感じである。

つまり、イラストBの方が、全体的一への方向が強く働いているということが、言い換えれば、時間の形式が強く働いているということが、直観的にわかる。

それでは、イラスト B に働いていて、イラスト A に働いていないものは何なのか？それこそが、時間の形式の働きを度をはかる際の指標であろう。次節では、その指標を突き止めた。その指標がわかることで、合成と分解の違いがわかり、ひいては交替の正体に近づけるからである。

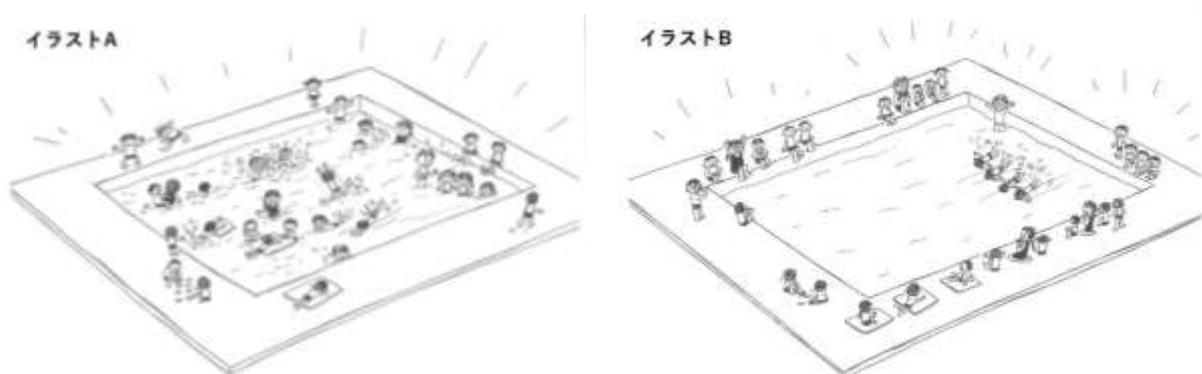
## 第三章 時間の共有——木村への準拠——

あらためて、本節で検討する問いを確認しておく。

イラストAよりも、イラストBの方が、時間を共有している感じがする。イラストAでは同じテーブルについてはいるものの、ばらばらのことをしている感じであるのに対して、イラストBでは同じテーブルについて一つのことをしている感じがする。イラストAにおいてよりも、イラストBにおいて強く働いているものがあるはずである。すでに登場した言葉で、何とか表現するならば、それは「多から一へ」という時間の形式である。

とはいえ、時間の形式は、イラストAにおいても、イラストBにおいても働いている。両者の差があるとしたら、その差は程度の差でしかない。だとするならば、時間の形式の働きの程度の差は、どのようにとらえることができるのか？程度の差をはかる際の指標は何か？それが本節で検討する問いである。

この問いを検討するために、本節では、時間とは何か？をあらためて問う。参照するのは木村敏<sup>きむらびん</sup>の時間論である。



### 【三つの次元】

木村敏は、時間を三つの次元に分ける。

それぞれ、第一の次元として「生命一般の根拠」の次元、第二の次元として「事事的」な時間や自己の次元、第三の次元として「物的」な時間や自己の次元と説明される（以下、コト、モノと片仮名で記すこともあるが、読み易さに配慮してのことであって、意味は平仮名のそれと同じである）<sup>26</sup>。

これら三つの次元は、「みてての渦」のみーちゃんに即して述べれば、それぞれ次のような次元である。

<sup>26</sup> 木村敏「タイミングと自己」『偶然性の精神病理』2000年、岩波現代文庫。p117。初出は、1993年。

みーちゃんが、プールの中で泳ぎを堪能しているとする。その際、みーちゃんの体は水に触れ、みーちゃんの耳には友だちの歓声が入ってきている。ひょっとしたら、蝉の声も耳に入っているかも知れない。しかし、みーちゃんが、泳ぎを堪能しているとき、みーちゃんは肌に触れているもの、耳に入ってくるものに対して「これは水だ」とか「あの歓声は、〇〇ちゃんの歓声だ」ということを意識していない。

全てのものが混然一体となった世界のなかに、みーちゃんは飲み込まれている。まずは、水も、みーちゃんも、誰かの歓声も、すべてが一体となった一つの世界がある。一体となって分けられていない一つの世界がある。そのような、すべてのものが一つとして混じり合っている世界を、第一の次元という。自分と、他のものが、まだ分けられていないという意味で、自他未分の世界と呼んでもいい<sup>27</sup>。

とはいえ、この自他未分の世界を、私たち人間が、全面的に見たり聞いたりすることはできない<sup>28</sup>。私たちに出来るのは、この自他未分の世界を「垣間見る」ことだけである。それも、自他未分の世界が私たちを触発し、私たちに「気持ちいい」「冷たい」「なんかイヤだ」といった感覚が生じることで、自他未分の世界を垣間見ることが出来るのみである<sup>29</sup>。

いわば、私たちは、個々別々の仕方で、第一の次元に触発され、第一の次元を垣間見る<sup>30</sup>。その次元が、第二の次元である。

第二の次元は、自他未分の世界ではない。繰り返しになるが、第二の次元において、私たちに生じる感覚は、個々それぞれのものである。同じ水に触れても、そこで生じる感覚は、みーちゃんとゆいちゃんとは異なる。私たちに生じる感覚が、個々それぞれのものである点で、もはや純粋な自他未分ではなくなっている。その点が、第一の次元と第二の次元の違いである。

第二の次元は、瞬間瞬間に立ち現れる世界である。自他未分の世界から、個々別々の感覚が、意識の中に発生する。その瞬間の次元である。それゆえ木村は、第二の次元のことを「第一の次元がその不可知性を突破してわれわれの意識に出現してきた最初の閃きのようなもの」ともいう<sup>31</sup>。

とはいえ、この第二の次元において、「これは水だ」とか「あの歓声は〇〇ちゃんの歓声だ」といった意識は働いていない。水も、みーちゃんも、誰かの歓声も、すべてが混然一体となった世界が、各々の仕方で感覚を触発している。そこには一つの出来事（コト）があるのであって、その出来事は「水」「みーちゃん」「〇〇ちゃんの歓声」といった諸要素（モノ）

<sup>27</sup> 木村敏「一人称の精神病理学へ向けて」『関係としての自己』2005年、みすず書房所収。p257。

<sup>28</sup> 木村敏「タイミングと自己」『偶然性の精神病理』2000年、岩波現代文庫。p117。初出は、1993年。

<sup>29</sup> 木村敏「自己の実像と虚像」『あいだと生命』2014年、創元社所収。p154。

<sup>30</sup> 木村敏「一人称の精神病理学へ向けて」『関係としての自己』2005年、みすず書房所収。p256。そこでは「メタノエシスの個別化」という表現で、第二の次元が語られている。

<sup>31</sup> 木村敏「タイミングと自己」『偶然性の精神病理』2000年、岩波現代文庫所収。p117。

には、いまだ分けられていない。

すなわち、第二の次元においては、自他未分の世界がいまだに垣間見えている。それに対して、一つの出来事の中で混じり合っていた諸要素を「これは水だ」とか「あの歓声は〇〇ちゃんの歓声だ」というように分けていくという意識が働く。この意識の働きによって、自他区分の世界が現れる。この自他区分の世界が第三の次元である。

第二の次元と、第三の次元は、次のように考えてもいい。例えばライブ会場で、「今日のライブはなんだかすごい！」と盛り上がっている。その盛り上がりの渦の中に、一緒に飲み込まれている。そのとき、「今日は、音のバランスがいい」とか「ギターのディストーションが効いている」とかいうことは、いちいち考えていない。「なんかいい」という感覚が生じているのみである。それが第二の次元である。

そうして盛り上がっているときに、横から「今日は、音のバランスがいいね」「ギターのディストーションが効いてるね」などと友達に言われるとする。友達は「盛り上がり」という塊を、「音のバランス」「ギターのディストーション」という諸要素に分けて、分析している。友達は盛り上がり飲み込まれているというよりは、そこから半歩下がって、その盛り上がり分析している。この友達が過ごしている時間が、第三の次元の時間である。第二の次元に比べれば、いささか冷めた次元であり、そこで起きていることから距離を置いた次元でもある。

第三の次元で行われているような、「これは水だ」「あれは〇〇ちゃんの歓声だ」というように要素ごとに、世界の構成物を分けること。それを、要素を対象化するという。自分とは分けられた対象として、世界の構成物を見るという意味である。これが、自分と他のものを分けるという自他区分の世界である。自他区分の世界のことを、コトの世界に対して、モノの世界という。コトの中では自他未分の性格を残していた各要素が、いまやはっきりと、モノとして分けられた世界という意味である。

自他未分という第一の次元、自他未分の世界から個々別々の感覚が生じる第二の次元、自他区分という第三の次元。これが、木村による時間の三つの次元である<sup>32</sup>。

---

<sup>32</sup> 木村自身は、この三つの次元の区分について、次のように述べている。「第一の次元は、それ自体はまだ時間とも自己とも呼べないが、後の段階で時間や自己についての経験が論じられるようになると、その源泉として想定せざるを得ない領域であって、禅で

「父母未生已前の自己」と言い、私が「メタノエシス的な生命の根拠」と言っている、いわば「メタ現象学的」なヴァーチュアリティ（潜勢性）の次元である。第二の次元は、この第一の次元がその不可知性を突破してわれわれの意識に出現してきた最初の閃きで、アクチュアル（現勢的）に経験可能ではあるけれど、発生するやいなやたちまち次の第三の次元に移行してしまう。私が従来から「こと的」ないし「ノエシス的」な時間や自己と呼んできたものに相当する。そしてこの第三の次元は、すでに意識の志向構造の中に展開ずみの「もの的」ないし「ノエマ的」な時間体験および自己体験であって、ここではもはや時間と自己の同義性を云々することができない。リアル（実在的）な時間および自己の次元だといってよいだろう。」木村敏『精神医学から臨床哲学へ』ミネルヴァ書房、2010年。p250。

【「みてての渦」で流れている「第二の次元」の時間】

「みてての渦」の子どもたちが共有しているのは、どの次元の時間であろうか？ 第一の次元は、そもそも全面的に経験することができないものだとするならば、「みてての渦」の子どもたちが共有しているのは、第二の次元か、第三の次元のどちらかである。この二つの次元の違いは、次のように考えるとわかりやすい。

例えば、私たちは「みてての渦」という出来事（コト）が生まれ出た瞬間を共有せずに、その出来事を振り返って諸要素（モノ）を書いた記録だけを読んで、「みてての渦」で流れていた時間を共有することができる。

この場合、出来事が生まれ出た瞬間を共有するのが第二の次元での時間の共有であり、その出来事の記録を読んで、何が起きていたのかを共有することが第三の次元での時間の共有である。

ここから、時間の共有には下の三つのパターンがあることがわかる。

表2：「時間の共有」の三つのパターン

	第二の次元（出来事）	第三の次元（記録）
①第二の次元と、第三の次元を、どちらも共有している。	出来事が生まれ出た瞬間を共有している。すなわち、その場にいた。	かつ、その出来事について書かれた記録も読んでいる。
②第二の次元のみ、共有している。	出来事が生まれ出た瞬間を共有している。すなわち、その場にいた。	しかし、その出来事について書かれた記録は読んでいない。
③第三の次元のみ、共有している。	出来事が生まれ出た瞬間を共有していない。すなわち、その場にいなかった。	しかし、その出来事について書かれた記録は読んでいる。

この表から考えると、「みてての渦」の子どもたちが行っていたのは、②のパターンの時間の共有である。すなわち、みてての渦の子どもたちが共有しているのは、第二の次元の時間である。

改めて整理すると、第二の次元の時間とは、流れている時間に身を置いているものが共有している時間である。それに対して、第三の次元の時間においては「流れている時間」がすでに「流れていた時間（過ぎた時間）」になってしまっている。

「流れている時間」だったものが、「流れていた時間」として、振り返られている。そんな時間のあり方が、第三の次元の時間のあり方である。

「みてての渦」の場面では、時間が、まさに、その瞬間に流れ出している。流れていった時間を振り返っているわけではない。それが、みてての渦の子どもたちが共有しているのは、第二の次元の時間である、ということの意味である。子どもたちは「流れている時間」にとともに身を置いていたのであって、「流れていた時間（過ぎた時間）」の記録を共有しているの

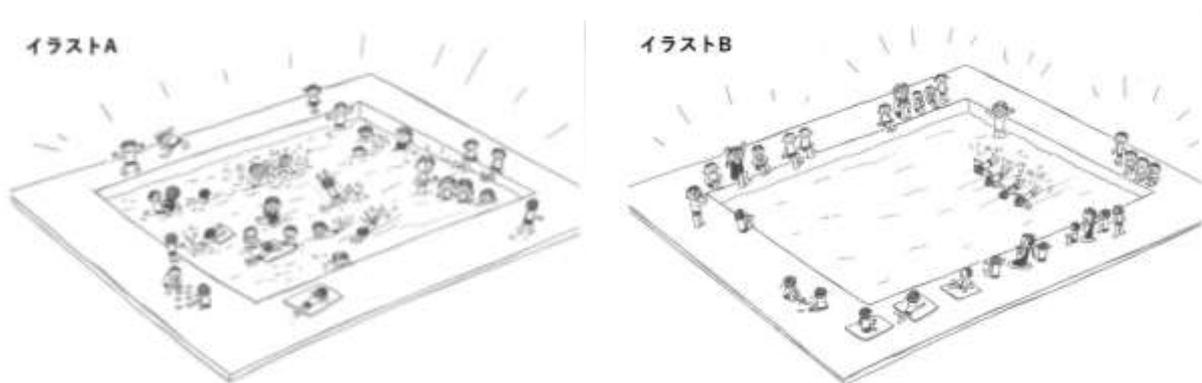
ではない。

ここまでの議論で、みてての渦の子どもたちが、第二の次元の時間を共有していることはわかった。それが「流れていた時間（過ぎた時間）」を共有することではなくて、「流れている時間」を共有していることだということもわかった。

しかし、それがわかったところで、イラストAとイラストBの違いは何か？という問いに答えることは、いまだできない。

時間の三つの次元の議論を導入することでわかったのは、みてての渦の子どもたちが共有している時間が「第二の次元の時間（流れている時間）」だということ——それだけである。本節冒頭で、「イラストBの方がイラストAよりも時間を共有している感じがする」と述べたが、いまできるのは、それを「イラストBの方がイラストAよりも、「第二の次元の時間（流れている時間）」を共有している感じがする」と書き改めることだけである。

イラストAとイラストBの違いは、どこにあるのか？その違いをはかる際の指標は何か？それらの問いに答えるために「第二の次元の時間（流れている時間）」とは何かという点を、さらに検討する必要がある。



#### 【死への傾斜と生への意志】

あらためて問おう。第二の次元の時間を共有するとは、何を共有することなのだろうか？その点について、大きな手掛かりを与えてくれるのが、木村による原方向の議論である。木村は、時間には「原方向」があるとし、それが「死への傾斜」と「生への意志」であると述べる。

時間に前後の意味方向が生ずるのも、わたしの考えでは決して第三次元の「過去把持」と「未来与持」の意識作用によるのではない。それはむしろ、生命体それ自身に生得的に備わった不可逆的な「死への傾斜」が——あるいはそれに逆らう「生への意志」が——意識の発生と同時に、つまり第二の次元において、密かに意識に持ち込んだ原方向である<sup>33</sup>。

<sup>33</sup> 木村敏「タイミングと自己」『偶然性の精神病理』2000年、岩波現代文庫所収。p119。

この箇所、木村は、第二の次元においては「死への傾斜」と「生への意志」が意識に働いている（持ち込まれている）と述べている。死への傾斜と生への意志については、もう少し、踏み込んだ理解が必要であろう。

死への傾斜とは「みてての渦」の場面では、声が消えていくこと、波が消えていくことである。一つ一つの声や、波が消えていく。そのとき、意識には、今あるものも、そのうち消え去るとい「死への傾斜」が忍び込む。その死への傾斜に逆らうように、この楽しい時間を続けたいという「生への意志」が生まれてくる。健太さんが書いた「この楽しさをもっと長く味わいたい！終わりにたくない！」という気持ち（本研究 p12）は、ここで木村が「生への意志」と呼んでいるものにあたる。

「第二の次元の時間（流れている時間）」を共有している」とはどういうことか。この問いに答えるのに有効なのが「死への傾斜」「生への意志」という概念である。両概念を用いれば「第二の次元の時間（流れている時間）」を共有している」とは「第二の次元の時間において働いている「死への傾斜」「生への意志」とを共に感じていることである」と書き改めることができる。

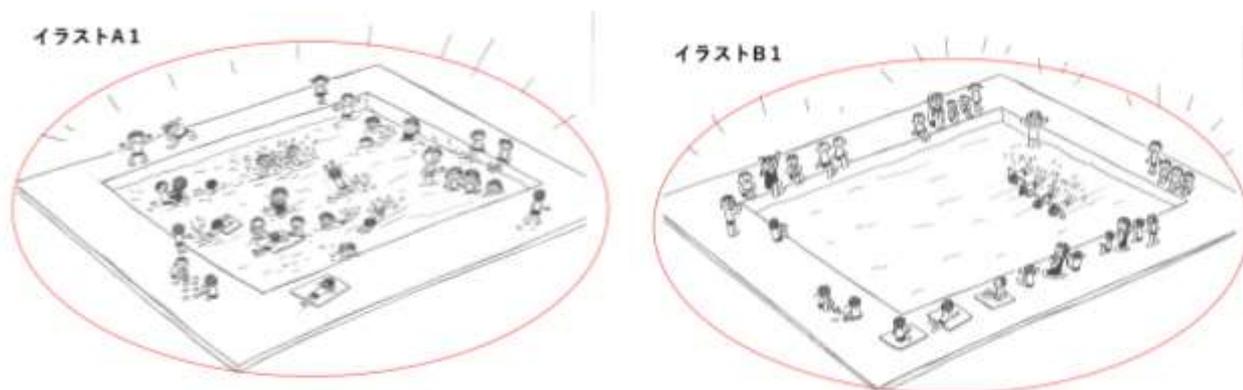
すなわち、イラスト Bの方が、イラスト Aよりも、第二の次元の時間を、すなわち「流れている時間」を共有している。言い換えれば、第二の次元の時間において働いている「死への傾斜」「生への意志」とを共に感じている。本節が到達したのは、そのような把握である。

さらに、本節で得た「死への傾斜」「生への意志」という概念を用いて、時間の共有のレベル（時間の形式の働きのレベル）を整理するならば、下の三段階の表が描ける。レベルAが時間の共有の程度がもっとも低く、レベルCがもっとも高い。

表3. 1. : 「時間の共有」の三つのレベル

	死への傾斜	生への意志
①	「死への傾斜」の共有もない	
②	「死への傾斜」の共有はある	しかし、「生への意志」は共有されていない
③	「死への傾斜」の共有がある	しかも「生への意志」も共有されている

この視点から、あらためてイラスト A とイラスト B の違いを考えてみる。



イラストA1の赤い円と、イラストB1の赤い円とでは、死への傾斜、生への意志を共有する度合いが違ふ。イラストB1では、赤い円のなかにいるメンバーが、そこで消えていく音や波を共に感じている。それに対して、イラストA1では、赤い円の中にいるメンバーが、消えていく音や波を共に感じているとは言い難い。

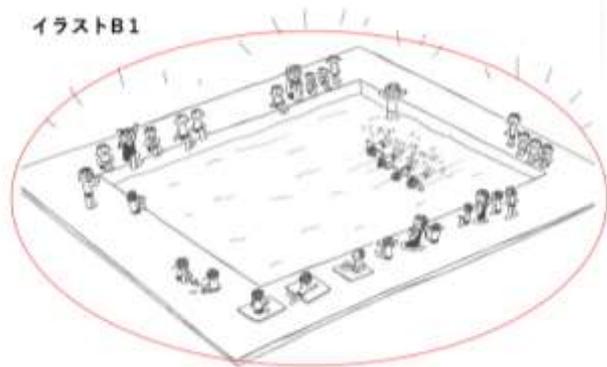
では、イラストAにおいて、消えていく音や波を共に感じている範囲を探るならば、イラストA2の青い円が、その範囲となるだろう。

つまり、イラストAにおいても、青い円の中にいる子どもたちどうしは、同じ音を聞き、同じ波を見ている。だから、音や波が消えていくという「死への傾斜」を共有している。そして、

「今あるものも、そのうち消え去る」という感覚を共有し、その感覚に逆らって、「この楽しさをもっと長く味わいたい！ 終わりたくない！」という生への意志を共有している。

その意味で、イラストAの中でも、青い円の中にいる子どもたちどうしは、レベル◎の度合いで、時間を共有していると言える。

一方で、イラストBにおいては、プール全体（イラストB1の赤い円）の中での時間の共有のレベルが、◎のレベルだと言えるだろう。



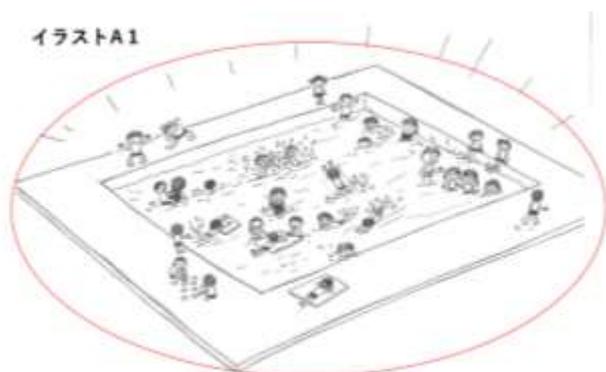
イラストBにおいては、赤い円の中にいる子どもたちが、消えていく音を共に聞き、消えていく波を共に見ている。そのとき「今あるものも、そのうち消え去る」という感覚が生じる。それに逆らい「この楽しさをもっと長く味わいたい！ 終わりたくない！」とい

う生への意志が生まれている。健太さんが書いた「この楽しさをもっと長く味わいたい！ 終わりたくない！ という気持ち」（本研究 p12）という生への意志が、プール全体で共有されている。

その意味で、イラストBにおいては、赤い円の中にいる子どもたちがレベル◎の度合いで、時間を共有しているのだと言える。

イラストAにおいては青い円の範囲で（イラストA2）、イラストBにおいては赤い円の範囲で（イラストB1）、レベル◎の度合いでの時間の共有が起きている。

それでは、イラストA1の赤い円の範囲では、どのレベルの時間の共有が起きていると言えるのだろうか。「レベル◎と◎の間あたり」というのが、その答だろう。



たしかに、プールの中の子どもたちは、ある程度、同じ音を聞いている。しかし、同じ波を見てはいない。だから、音が消えていくという「死への傾斜」は共有しているが、波が消えていくという「死への傾斜」は共有していない。赤い円の中の子どもたちどうしは、青い円の中の子どもたちどうしほどは、「死への傾斜」を共に感じてはいない。

そして、「この楽しさをもっと長く味わいたい！終わりにたくない！」という気持ち」は、青い円の中で、個別に生じているとしても、赤い円の中で共有されているわけではない。

以上を考えれば、時間の共有の度合いは、レベル④と⑤の間あたり、ということになるのだろう。

すなわち、イラスト A1 の赤い円においては「死への傾斜の、小さな共有が、複数ある」。それに対して、イラスト B1 の赤い円では「死への傾斜の、大きな共有が、一つある」。これがイラスト A とイラスト B の違いは何か？という問いへの答である。

表4. : イラスト A とイラスト B の違い

イラスト A (A1)	死への傾斜の、小さな共有が、複数ある
イラスト B (B1)	死への傾斜の、大きな共有が、一つある。

イラスト A とイラスト B の違いを測る指標は何か？という問いにも、このまま答えておく。下の表が示す④⑤⑥の違いが、イラスト A とイラスト B の違いを測る指標である。

表3. 2. : イラスト A とイラスト B の違いを測る指標

	死への傾斜	生への意志	
④	「死への傾斜」の共有もない		イラスト A の赤い円 (イラスト A1)
⑤	「死への傾斜」の共有はある	しかし、「生への意志」は共有されていない	
⑥	「死への傾斜」の共有がある	しかも「生への意志」も共有されている	イラスト A の青い円 (イラスト A2) イラスト B の赤い円 (イラスト B1)

とはいえ、疑問が一つ溶けたところで、新たな疑問が生じる。それは「死への傾斜」が共有されると、どうして「生への意志」が共有されるのか？という疑問である。

ここまでは、死への傾斜が生じれば、それに逆らって、生への意志が生じるということ

前提としていた。しかし、それは自明ではない。すなわち、死への予感を共有すれば、自ずと生への意志が共有される。ということではない。

死への傾斜に逆らい、生への意志が生じること。さらには、生への意志が共有されること。そこには「育ち」の問題が含まれている。和光保育園での、みーちゃんとゆいちゃんの「育ち」の履歴があるからこそ、みーちゃんとゆいちゃんには生への意志が芽生え、二人の間で生への意志が共有される。

「みてての渦」に注ぎ込まれた二人の「育ち」の履歴。それを明らかにするためにも、本節で検討した木村敏の時間論を、教育学の議論（すなわち、人間の「育ち」の内実を解明する議論）として、引き受けなくてはならない。

そのための枠組みを提供してくれる格好の理論がある。それが大田<sup>たかし</sup>堯の「たくらみの共有」の理論である。

## 全体の中括 ——2018年度報告書のまとめ——

交替とは何か？その検討を主題として始まった本研究も、すでに 33 頁を費やしてしまった。事例部分の 21 頁を含めれば、合計で 54 頁にも及ぶ。

ここで一度、立ち止まって、現段階までの見取り図と到達点を確認し、あわせて今後の見通しを記しておく。

### 現段階までの見取り図と到達点

交替とは何か？という問いに対して、現在、到達した答えは「交替とは、生への意志を共有したものどうしによる、役割の分解と合成である」という答である。

その点を、イラスト 1 とイラスト B1 を重ね合わせた、下のイラスト 4 を見ながら、確認しておく。



イラスト 4 のうち、役割交替に着目したイラスト 1 について、交替が「あける (ゆずる)」と「入る」の交替である点については、第一章の p25 頁で言及した。

さらに、第二章において「あける (ゆずる)」と「入る」が、それぞれ分解と合成に対応することを述べ、さらには、分解・合成に先立って、エントロピーの増大という生命体がコントロールできない作用が生じていることを述べた。このエントロピーの増大とは「高エネルギーの状態がエネルギーを放出してやがては低エネルギーの状態になること、あるいは、秩序の高い状態が徐々に崩壊して秩序の低い状態に陥ること」を意味する。第二章では、この「エントロピーの増大」「分解」「合成」を、それぞれ「壊れる」「壊す」「つ

くる」とも表現した。

第一章、第二章で登場した以上の用語・概念を図示的に整理しておく。

表4. 1. : 第一章、第二章に登場した用語の整理

	壊れる	壊す	つくる
第一章 p25		あける、ゆずる	入る
第二章 p33	エントロピーの増大	分解	合成
第二章 p33	高エネルギーの状態がエネルギーを放出してやがては低エネルギーの状態になること		
第二章 p33	壊れる	壊す	つくる

イラストに戻れば、以上がイラスト1で表した役割交替の検討である。

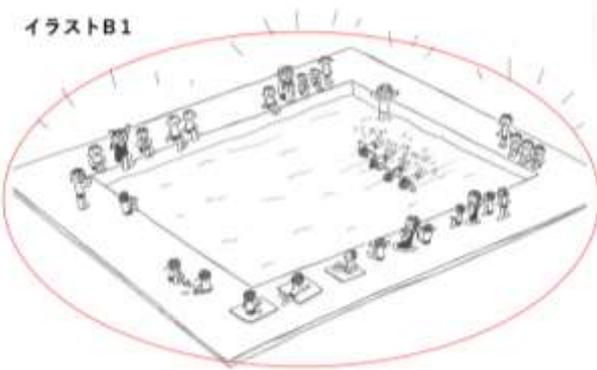


イラスト4のうち、外側の赤い円に着目し（イラスト B1）、それが生への意志の共有の範囲であることを示したのが、第三章である。

そこでは、時間の共有のレベルとして、①死への傾斜の共有もないレベル、②死への傾斜は共有しているが、生への意志は共有していないレベル、③死への傾斜も、生への意志も共有しているレベル、の三つのレベルを挙げ、表3. 1.のように整理した（本研究 p51）。先ほど、エントロピーの増大とは「高エネルギーの状態がエネルギーを放出してやがては低エネルギーの状態になること、あるいは、秩序の高い状態が徐々に崩壊して秩序の低い状態に陥ること」を意味すると述べたが、

これは第三章で「声が消えたり、波が消えたりすること」、すなわち「死への傾斜」と呼んだものそのものである（本研究 p51）。この「死への傾斜」に対して、「この楽しさをもっと長く味わいたい！ 終わりたくない！」という気持ち）すなわち「生への意志」が生じる。これらを踏まえて、先の表4. 1. に加筆すれば、本研究で登場した用語・概念を、表4. 2. のように整理できる。

表4. 2. : 本研究に登場した用語の整理

	壊れる 死への傾斜	生への意志	壊す	つくる
第一章 p25			あける、 ゆずる	入る
第二章 p33	エントロピーの増大		分解	合成
第二章 p33	高エネルギーの状態がエ ネルギーを放出してやが ては低エネルギーの状態 になること			
第二章 p33	壊れる		壊す	つくる
第三章 p51	声が消えたり、波が消え たりすること	この楽しさをもっと 長く味わいたい！終 わりたくない！とい う気持ち		
第三章 p51	死への傾斜	生への意志		

あらためて、イラスト4に戻れば、交替とは、イラストB1の赤い円の中で、イラスト1の役割交替が行われていることである。すなわち「交替とは、生への意志を共有したもののうしによる、役割の分解と合成である」。

以上の表とイラストが、現段階までの見取り図と到達点である。以下、今後の見通しを示して、2018年度までの研究報告を、一度閉じる。

### 今後の見通し

今後の検討は、みーちゃんとゆいちゃんを始めとした和光保育園の子どもたちが、役割を分解することができる（ゆずることができる）のはどうしてなのか？「生への意志」を共有できるのは、どうしてなのか？という問いをめぐって行われる。

死への傾斜は、人間がコントロールできる働きではない。その死への傾斜から、生への意志という人間の営みがどのように生まれてくるのか。それを示すのが大田堯の「たくらみの共有」の議論である。

大田の理論と、みてての渦の子どもたちの姿を通じて、死への傾斜から生への意志が生まれてくる理路を示す。そこでは「生への意志」を共有するとはどのようなことであるのかを、より具体的に示すこともできるだろう。それが今後の見通しの第一である。

大田の理論を、育ちの順序を含んだ理論として構成しなおすときに、エリク・H・エリクソンの理論が登場する。そこでは、大田の理論とエリクソンの理論とを擦り合わせることで「役割をゆずり、交替する姿」「生への意志」を共有する姿へと注ぎ込まれた、子どもた

ちの「育ち」の履歴を示す。それが今後の見通しの第二である。

いわば、第一の見通しとして、「死への傾斜」「生への意志」の枠組みと対応する「育ち」の理論である、大田の「たくらみの共有」論が登場する。さらに、第二の見通しとして、大田の「たくらみの共有」論を「育ち」の履歴として論じる枠組みである、エリクソンの理論が登場する。

以上の検討をもって、みーちゃん、ゆいちゃんたちが役割をゆずることができる理由、生への意志を共有することができる理由を、「育ち」の履歴を踏まえつつ、明らかにしたい。それが今後の見通しである。

表4. 3. : 本研究の見取り図と見通し

	壊れる 死への傾斜	生への意志	壊す	つくる
第一章 p25			あける、ゆずる	入る
第二章 p33	エントロピーの増大		分解	合成
第二章 p33	高エネルギーの状態がエネルギーを放出してやがては低エネルギーの状態になること			
第二章 p33	壊れる		壊す	つくる
第三章 p51	声が消えたり、波が消えたりすること	この楽しさをもっと長く味わいたい！終わりがたくない！という気持ち		
第三章 p51	死への傾斜	生への意志		
今後の検討課題（見通し）		どうして生への意志を共有できるのか	どうしてあける（ゆずる）ことができるのか	

以上の見通しをもって本研究は続く。本章のタイトルを「全体の総括」とするのではなく、「全体の中括」としたのは、そのためである。なお、続きを web 上に公開するのか、もしくは書籍化するのかは未定である。以上をもって、2018 年度の報告書を、一度閉じる。

巻末資料

## ローカル・ガバナンスによる地域福祉に関する調査研究（中間報告）

久保 健太

### 1. 当初の研究内容、研究メンバー、研究目的

まずは、本研究の【研究内容】【研究メンバー】【研究目的】を「研究計画書」（2017年5月）より転記しておく。

#### 【研究内容】

ローカル・ガバナンスと相通ずる哲学のもとで行われている保育実践をしっかりと書ききる。その際、その実践に潜む「学び」を丁寧に構造化する。それによって、保育実践へのヒントを加盟園にフィードバックするとともに、周辺諸学との連動に寄与するエビデンスを蓄積する。

#### 【研究メンバー】

研究担当者（1名）：久保健太（関東学院大学専任講師）。

研究協力者（3名）：鈴木八朗（くらき永田保育園園長）、鈴木秀弘（和光保育園副園長）、田中嘉久（風の子藤水保育園園長）

#### 【研究目的】

本研究の目的は「子ども・子育てを中心にした地域づくりの実践例を複数調査し、共通項を見出し、地域福祉を理論化すること」である。

より具体的には、以下の2点が、本研究の当面の目的である。

- ①「保育」の現場で起きている「学び」を（現象のレベルだけで把握するのではなく）構造のレベルで把握する。そのための理論的枠組みを得る。
- ②その理論的枠組みを用いることで「学び」の構造を明らかにする。のみならず、「学び」を生み出す「保育」の構造を明らかにする。

この2点が本研究の当面の目的となる。誤解のないように書き添えれば、保育実践がまず存在するのであって、理論的枠組みは、それを読み解くために編み出されるものに過ぎない。

さて、以上の2つの目的を達成することで、「実践例」から教訓を得ることができる。のみならず、実践するための手立てを明らかにすることができる（そうして、保育実践へのヒントを、加盟園にフィードバックできる）。

加えて、「保育」の構造を明らかにしておくことによって、保育実践分野にかんする調査研究との将来的な連動も果たそうとする。

さらには、「①」における理論的枠組みの柱として、ユリア・エンゲストローム、エティエンヌ・ウェンガーの理論（両者に共通するのは、学びを生み出すコミュニティと制度に対する問題意識である）を採用することによって、保育制度分野にかんする調査研究との将来的な連動も果たそうとする。

## 2. 今年度の研究の進展

以上の研究内容、研究目的で研究を進めるにあたって、まずは「ローカル・ガバナンス」を定義した。私は2017年7月号の『保育通信』で、「**自分たちの手で、自分たちの社会をつくること**」が民主主義であり、この考え方に則ってメンバー自身が自治を行なうことがローカル・ガバナンスであると定めた<sup>34</sup>。

この定義に則って、私たちのチームは、このようなローカル・ガバナンスが、この日本社会において、どのように可能か？ということの研究した。その際、保育場面における子どもと大人の姿から、この問いに答えようとした。

その軌跡を、時系列に沿って整理することで中間報告としたい。2017年度に行った10回の打ち合わせの内容に沿って整理する。

### ①6月15日（於 関東学院大学）

まずは「保育実践がまず存在するのであって、理論的枠組みは、それを読み解くために編み出されるものに過ぎない」という立場をとることを確認した。その立場で研究を進めるにあたって、7、8、9月の打ち合わせを各メンバーの保育園で行い、保育園視察を兼ねることにした。

保育園視察の目的は、①「自分たちの手で、自分たちの社会をつくる」際に、何がそのような営みを成り立たせているのかを保育場面からつかむこと、②いずれ保育実践をメンバー同士で発表し合うときに、保育園の風景が浮かぶようにしておくこと——主に、この2点であった。

### ②7月25日（千葉県 和光保育園訪問）、③9月7日（三重県 風の子藤水保育園訪問）、④9月14日（神奈川県 くらき永田保育園訪問）、⑤10月3日（於 全国保育会館）、⑥11月7日（於 全国保育会館）

7月から9月にかけて、お互いの園を訪問し、意見交換し、理解を深めた。その成果が10月以降に結実した。

10月3日（第五回）の打ち合わせでは「自分たちの手で、自分たちの社会をつくる」際の土台が何であるかについて話し合った。「**目には見えないが、その場のメンバーに共有されている暗黙のルール**」「**目には見えないが、秩序感のもとになっているもの**」が土台にあることが明らかになってきた。

11月7日（第六回）の打ち合わせでは「熱量」というキーワードが登場した。すなわち、子どもたちは、その「熱量」「活気」を放出しようとして、自分たちなりの「暗黙のルール」「自分たちの社会」「自分たちの構造・仕組み」をつくっていることを見出した。

「熱量」を放出するために「構造」がつくられるという理論モデルは、熱力学・生命科学の「**散逸構造**」理論に見出せるが、その「散逸構造」理論で、保育の場における社会づくりを説明してみようという方針が出てきた。

---

<sup>34</sup> 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会「平成29年度に取り組む具体的な課題について その2」『保育通信 748号』所収、2017年7月、p49。

第1節で述べたように、当初の研究目的は「子ども・子育てを中心にした地域づくりの実践例を複数調査し、共通項を見出す」ことであった。しかし、この段階で、大人が登場人物である事例を扱うのではなく、**大人と子どもの両者が登場人物である事例を扱う**という方針への転換が起きた。

#### ⑦12月19日（於 全国保育会館）

12月の打ち合わせでは、複数の事例を調査する方針から、**一つの事例を徹底的に理解しようとする方針**への転換を行なった。

そこには、グニラ・ダールベリやピーター・モスの議論が影響している。ダールベリらは『「保育の質」の議論を問う』という著書の中で<sup>35</sup>、「質の議論」を超えて「意味生成の議論」を行なうことを提案している。すなわち、「質の議論」では複数の事例を一つの物差しで測り、質の優劣をつけようとする。私たちのチームで言えば、くらき永田保育園、和光保育園、風の子藤水保育園という、地域も、規模も、子どもの数も、何もかもが違う保育園を、一つの物差しで測ろうとする。それに対して「意味生成の議論」では、一つの事例を、とことん多様に理解しようとする。そうして、一つの事例から、多くの「意味」を読み取ろうとし、生み出そうとする——すなわち、「意味」を「生成」しようとする。

私がダールベリらの文献の翻訳にかかわっているので、メンバーにその理論を紹介したところ、メンバーの共感を呼んだ。メンバーと語ったことを以下、記しておく。

- ・質で考えすぎてしまうと、評価の基準が「できた／できない」になってしまう。
- ・質の基準を頭の片隅において子どもに関わることは大事だが、基準に囚われすぎると、子どもそのものを見ることが疎かになってしまう。
- ・保育は「全体」を見るべきものなのに、質を測ろうとすると、どうしても個々の「部分」をバラバラに見てしまう。
- ・それぞれの「部分」の因果論を非線形的にではなく線形的に見てしまう。うまくいった場合も、うまくいかなかった場合も、保育者個人に、その原因を帰すことになりがちである。

こうした議論を経て、複数の事例を調査する方針から、一つの事例を徹底的に理解する方針への転換を行なった。幸いにも、この方針転換は私保連研究機構の理解を得ることもできた。

保育実践の事例は和光保育園から取ることとなった。多様な意味生成が可能だから、というのが、その理由である。「歴史」という観点。「コミュニティ」という観点。「身体」という観点。「熱量」という観点。あらゆる観点からの読みが可能である「プールの場面」（2016年8月）の事例<sup>36</sup>を、和光保育園の鈴木秀弘さんにまとめてもらうことにした。事例執筆の

---

<sup>35</sup> G. Dahlberg, P. Moss, A. Pence “Beyond Quality in Early Childhood Education and Care: Languages of evaluation (Routledge Education Classic Edition)”2013. 『「保育の質」の議論を問う—評価のオルタナティブ』(ミネルヴァ書房) というタイトルで邦訳刊行予定。

<sup>36</sup> 年長のみーちゃんとゆいちゃんが、保育者の健太さんに「てをつないでおよげるよ」と言う。健太さんは、何事にたいしても慎重な印象のみーちゃんが、友だちと一緒に自信気

時間をとるために、1月の打合わせは休みにし、2月に集まることにした。加えて、2月にもう一度、和光保育園に足を運ぶことにした。

### ⑧2月16日（於 全国保育会館）、⑨2月22日（千葉県 和光保育園訪問）

2月上旬までに鈴木秀弘さんを含めた和光保育園のメンバーが「プールの場面」の実践事例を書いてくれた。2月の打合わせでは、その実践事例を読み合い、考察を深めた。2018年3月の時点で、実践事例から得られる知見が三つ明らかになっている。それぞれ「**エリクソン・山竹理論**」「**上昇・下降の交替構造**」「**焦りのない先回り**」というタイトルがついている。その詳細は最終報告に譲るが、ここでは「**焦りのない先回り**」について、若干述べておく。

保育者は、さまざまな想定を働かせながら保育をしている。いわば保育を「先回り」している。すぐれた保育者は「先回り」ができるからこそ「焦る」。つまり、様々な想定ができるが故に、準備をするのに焦る。そうした「焦り」の背景には「失敗したらどうしよう？」「周りはどう感じるだろう？」という感情がある。この感情は「周りから自分がどう受け入れられるか」に対する「不安」「不信」とでも言うべきものであり、そう考えると、「焦り」の背景には「不安」や「不信」が働いているのだと言える。

また、その「焦り」に「保育の質」が、かかわっている場合もある。すなわち、質を気にしすぎるあまり、「質が落ちないように」と考えて、焦って先回りをしてしまっている。いずれにせよ「**過剰な先回り**」が起きている。

「プールの場面」を読み解いて分かってきたのは、そこでの子どもたちには「過剰な先回り」がないということである。もちろん子どもたちだって「予測」や「想定」はしている。しているからこそ「楽しそうなことが起こりそうだ」という期待を膨らませ、その期待に飛び込んでいく。しかし、そこには「怒られるかも知れない」「見放されるかも知れない」といった「不信」がない。

逆に「うまくいかななくても、助けてと言えば、助けてくれる」という「信頼」がある。その信頼が「焦りのない先回り」を成り立たせている。この「信頼」を「民主主義の担い手」の土台に置くのが「**エリクソン・山竹理論**」なのだが、その詳細は、最終報告に譲る。

### ⑩3月16日（於 全国保育会館）

2017年度の最後として、私が書いた、この中間報告案を検討した。

以上が、「ローカル・ガバナンスによる地域福祉に関する調査研究」の中間報告である。

---

にそう言うので、嬉しくなって「おお！見せて見せて」と言う。

二人が見事に手を繋いで浮いて見せてくれたので、健太さんは益々嬉しくなって「おおすごい！」と言う。すると、それを周りで見っていた子達が、「わたしもやりたい」と参加してくる。そのうちに、「こんどはけんたいっしょに、4にんでやってみよう」と一段と盛り上がる。

そうして「みてて！」と「おおお！すごい！」の渦が広がっていく。その盛り上がりの勢いの中で、誰か一人が「ねえながれるぷーるやろう！」と提案する。健太さんがすかさず「いいね流れるプールやろう！」と応じることで、さらに盛り上がっていく。

要約すれば、「大人が登場人物である事例から、大人と子どもの両者が登場人物である事例へ」「複数の事例を調査する方針から、一つの事例を徹底的に理解しようとする方針へ」の転換を経て、「プールの場面」の事例検討へと至り、「エリクソン - 山竹理論」「上昇・下降の交替構造」「焦りのない先回り」という知見を得始めているところである。

ちなみに「先回り」の理論は、福岡伸一の生命科学や、木村敏の臨床哲学に触発された理論である。先述の「散逸構造」理論を含め、周辺諸学の知見を意識的に採り入れることで、周辺諸学との将来的な連携・連動に備えたいと考えている。